

# 『程氏家塾読書分年日程』訳注稿（十）

松野 敏之・中嶋 諒

本稿は、朱子学研究会の読書会で扱った程端礼『程氏家塾読書分年日程』の訳注を試みるもので、本誌一三号からの連載である。読書会の参加者は以下の通りであり、本稿は担当者（氏名の上に「※」を表記）の草稿を元に作成している。

宮下和大（麗澤大学モラロジー研究所専任研究員）・阿部光磨（早稲田大学講師）・大場一央（明治大学講師）・小池直（早稲田大学大学院博士後期課程満期退学）・田村有見恵（早稲田大学大学院博士後期課程）・原信太郎アレシヤンドレ（早稲田大学大学院博士後期課程）・佐々木仁美（明治大学付属明治高等学校・中学校教諭）・上村新治（早稲田大学大学院修士課程修了）・※中嶋諒（学習院大学学長付国際研究交流オフィSPD共同研究員）・※松野敏之（國士舘大学専任講師）

【凡例】

- ・底本には常熟瞿氏鐵琴銅劍樓藏元刊本（四部叢刊所収）を用い、叢書集成本（清刊本・正誼堂全書本）・四庫全書本との校異を示した。但し、煩を避けるため、異体字・通假字・同義語の類の異同は割愛した。
- ・解釈には、『程氏家塾読書分年日程』（昌平叢書所収）および姜漢椿校注『程氏家塾読書分年日程』（黄山書社出版、一九九二年四月）を参照した。
- ・訳注は、原文・校異・注釈・通釈の順で並ぶ。
- ・原文・訳文中の「」を附した部分は、小字双行注（割注）あるいは小字注に相当する。
- ・注釈で引用した原文には「」を附して訓読を示した。但し、一読して明らかな場合には省略している。
- ・訳文中で（ ）を附した部分は、訳者の補注である。

【『程氏家塾読書分年日程』卷三（底本 卷三・二十四丁表十行）卷三・四十二丁表二行】

因借而借

難「鳥也、因音借爲艱難之難、因艱難之難、借爲險難之難、去聲。」  
爲「母猴也、因音借爲作爲之爲、因作爲之爲、借爲相爲之爲、去聲。」

射〔本射御之射、因義借爲發射之射、食亦切、因發射之音、借爲無射之射、音亦、律名。〕

數〔本厭數之數、羊益切、因義借爲數敗之數、多路切、書彛倫攸數、因數敗之音、借爲數暨之數、音徒、書惟其<sup>1</sup>

數暨蒞。〕

亨〔音亨、本饗也、因義借爲亨飪之亨、普庚切、因亨飪之音、借爲亨嘉之亨。〕

來〔本麥也、因音借爲往來之來、因往來之義、借爲勞來之來、音賚。〕

矜〔本矛柄也、因音借爲矜憐之矜、因矜憐之義、借爲矜寡之矜、音鰥。〕

適〔往也、因音借爲適責之適、音謫、詩勿予禍適、因適責之音、借爲適匹之適、音敵。禮大夫計於同國適者。〕

參〔七南切、間廁也、因義借爲參差之參、楚金切、因參差之音、借爲參伐之參、所金切。〕

邪〔本琅邪之邪、因音借爲語辭之邪、因語辭之義、借爲虛邪之邪、音徐、詩其虛其邪。〕

食〔本啖食之食、因義借爲飲食之食、音伺、因飲食之食、借爲食其之食、音異。〕

費〔本費用之費、因音借爲費邑之費、音秘、因費邑之義、借爲費氏之費、扶未切。〕

崔〔本南山崔崔之崔、子惟切、因義借爲崔嵬之崔、慈回切、因崔嵬之音、借爲崔氏之崔、音催。〕

不〔本鄂不韡韡之不、音跌、因音借爲可不之不、音否、因可不之義、借爲不可之不、音弗。〕

填〔本填塞之填、因義借爲填壓之填、音鎮、因填壓之音、借爲填久之填、音塵、詩倉兄填兮。〕

罷〔本罷置之罷、因義借爲罷困之罷、音疲、因罷困之音、借爲罷辜之罷、鋪逼切、禮以罷辜祭四方。〕

質〔本質幣之質、音贄、因義借爲交質之質、音至、因交質之音、借爲形質之質。〕

畜〔本田畜之畜、敕六切、因音借爲畜養之畜、許六切、因畜養之義、借爲六畜之畜、許又切。〕

治「平聲、水也、因音借爲治理之治、因治理之義、借爲平治之治、去聲。」  
乞「氣也、因音借爲與人之乞、音氣、因與人之義、借爲求人之乞、入聲。」  
能「奴來切、獸也、因義借爲能鑑之能、三足鑑、因能鑑之音、借爲能事之能、音耐、又爲三能之能、音台。」  
凡此之類、竝因借而借。

右四十三。

〔校異〕

a 禮大夫計於同國適者：叢書集成本・四庫全書本、此の九字無し。 b 食：叢書集成本、「音」に作る。  
c 爲：四庫全書本、此の字無し。 d 韓韓：叢書集成本・四庫全書本、「韓韓」に作る。 e 借：叢書集成本、此の字無し。 f 因：叢書集成本、此の字無し。

〔注釈〕

(1) 惟其敦堅茨：いまの『尚書』梓材には「惟其塗堅茨」とあるが、その孔穎達唐の疏に「言敦即古塗字」  
「敦と言ふは即ち古の塗字」とある。

(2) 右四十三：實際には二十一字が見えるのみ。『通志』仮借略も同様。

〔通釈〕

仮借に拠つてさらに借りてゐる仮借

難「鳥。音に拠つて、借りて艱難の「難」となる。艱難の「難」に拠つて、借りて險難（險しく難む）  
の「難」となる。去声。」

為「母猿。音に拠つて、借りて作為の「為」となる。作為の「為」に拠つて、借りて相為（相為にす）の「為」となる。去声。」

射「もと射御（弓術・馬術）の「射」<sup>●五</sup>。意に拠つて、借りて発射（弓を射る）の「射」となる。食亦<sup>●入</sup>の切。

発射の「射」の音に拠つて、借りて無射（十二律の二）の「射」となる。音は亦<sup>●入</sup>。十二律の名。」

敦「もと厭敦（敦う）の「敦」<sup>いと</sup>で、羊益<sup>●入</sup>の切。意に拠つて、借りて敦敗（敦れる）の「敦」となる。多路<sup>●五</sup>の切。『尚書』（洪範）に、「彝倫攸ち敦る」とある。敦敗の「敦」の音に拠つて、借りて敦堅（塗る）

の「敦」となる。音は徒。『尚書』（梓材）に「惟<sup>すなは</sup>其<sup>し</sup>堅<sup>ん</sup>茨<sup>し</sup>に敦る」とある。」

亨「音は享<sup>●上</sup>で、もと饗<sup>しな</sup>すこと。意に拠つて、借りて亨飪（烹<sup>に</sup>る）の「亨」となる。普庚の切。亨飪の「亨」の音に拠つて、借りて亨嘉（嘉<sup>よ</sup>く亨<sup>とお</sup>る）の「亨」となる。」

来「もと麦のこと。音に拠つて、借りて往來の「来」となる。往來の「来」の意に拠つて、借りて勞來（勸<sup>うら</sup>う）の「来」となる。音は賁<sup>●五</sup>。」

矜「もと矛の柄<sup>え</sup>。音に拠つて、借りて矜憐（矜<sup>あわ</sup>れむ）の「矜」となる。矜憐の「矜」の意に拠つて、借りて矜寡（寡夫、寡婦）の「矜」となる。音は鰥。」

適「往く（適<sup>ゆ</sup>く）こと。音に拠つて、借りて適責（適<sup>とが</sup>める）の「適」となる。音は謫<sup>●入</sup>。『毛詩』（商頌・殷武）に「禍適（禍<sup>くわ</sup>いと適<sup>たたく</sup>め）を予<sup>あた</sup>ふる勿<sup>な</sup>し」とある。適責の「適」の音に拠つて、借りて適匹（敵<sup>かな</sup>う）の「適」となる。音は敵<sup>●入</sup>。『礼記』（雜記上）に「大夫同国の適者（身分が対等な者）に計ぐ」とある。」

参「七南の切で、間廁（参わる）。意に拠つて、借りて参差（入りまじり不揃いなさま）の「参」となる。楚金の切。参差の「参」の音に拠つて、借りて参伐（星名）の「参」となる。所金の切。」

邪「もと琅邪（地名）の「邪」。音に拠つて、借りて助字の「邪」となる。助字の「邪」の意に拠つて、借りて虚邪（邪）の「邪」となる。音は徐。『毛詩』（邶風・北風）に「其れ虚、其れ邪」とある。」食「もと啖食（食らう）の「食」。意に拠つて、借りて飲食（食糧）の「食」となる。音は伺。飲食の「食」に拠つて、借りて酈食其（人名）の「食」となる。音は異。」

費「もと費用の「費」。音に拠つて、借りて費邑（地名）の「費」となる。音は秘。費邑の「費」の意によつて、借りて費氏（人姓）の「費」となる。扶未の切。」

崔「もと『毛詩』齐風・南山の」「南山崔崔（山が広大なさま）」の「崔」で、子惟の切。意に拠つて、借りて崔嵬（山が高く険しいさま）の「崔」となる。慈回の切。崔嵬の「崔」の音に拠つて、借りて崔氏（人姓）の「崔」となる。音は催。」

不「もと『毛詩』小雅・常棣」「鄂不韡韡（花房が美しく咲きほこる）」の「不」（花の萼）で、音は趺。音に拠つて、借りて可不（可なるやいや）の「不」となる。音は否。可不の「不」の意に拠つて、借りて不可の「不」となる。音は弗。」

填「もと填塞（填がる）の「填」。意に拠つて、借りて填庄（填める）の「填」となる。音は鎮。填庄の「填」の音に拠つて、借りて填久（填しい）の「填」となる。音は塵。『毛詩』（大雅・桑柔）に「倉兄填し」とある。」

罷「もと罷置（罷める）の「罷」。意に拠つて、借りて罷困（罷れる）の「罷」となる。音は疲。罷困の「罷」の音に拠つて、借りて罷辜（生け贄となる動物を引き裂き供えること）の「罷」となる。鋪遍の切。『周礼』（春官・大宗伯）に「罷辜を以て四方を祭る」とある。」

質「もと質幣（絹布などの贈り物）の「質」で、音は贄。意に拠つて、借りて交質（人質）の「質」となる。音は至。交質の「質」の音に拠つて、借りて形質の「質」となる。」

畜「もと田畜（耕作と牧畜）の畜で、勅六の切。音に拠つて、借りて畜養（畜う）の「畜」となる。許六の切。畜養の「畜」の意に拠つて、借りて六畜（馬、牛、羊、鶏、狗、猪の六種の家畜）の「畜」となる。許又の切。」

治「平声で、河川（山東東萊より南に流れて海に注ぐ治水）のこと。音に拠つて、借りて治理（治める）の「治」となる。治理の「治」の意に拠つて、借りて平治（太平なさま）の「治」となる。去声。」  
乞「雲氣。音に拠つて、借りて与人（乞える）の「乞」となる。音は氣。与人の意に拠つて、借りて求人（乞う）の「乞」となる。入声。」

能「奴来の切で、（熊に似た）獸。意に拠つて、借りて能鼈の「能」となる。三本足の鼈。能鼈の「能」の音に拠つて、借りて能事（能える）の「能」となる。音は耐。また三能（紫微星を守る三つの星）の「能」となる。音は台。」

これらの類は、みな仮借に拠つてさらに借りている仮借である。

右、四十三字。

語辭之借

序曰、書者象也。凡有形有象者、則可以爲象、故有其書。無形無象者、則不可爲象、故無其書。語辭是也。語辭之用雖多、於主義不立、竝從假借。

之〔菌也。〕

也〔陰也。〕

云〔雲也。〕

思〔慮也。〕

邪〔琅邪之地。〕

焉〔焉也。〕

惟〔思也。〕

既〔小食也。〕

盍〔覆也。〕

而〔面毛也。〕

須〔髭也。〕

蓋〔艸覆也。〕

斯〔折也。〕

然〔燎也。〕

以〔蕙政實也。〕

矣〔箭鏃也。〕

爲〔母猴也。〕

居〔蹲也。〕

且〔子余切、薦几也。〕

諸〔辨也、詩日居月諸。〕

耳〔人耳也。〕

哉〔言之間也。〕

兮〔气也。〕

爾〔華繁也、詩彼爾維何、維常之華。〕

乎〔气也。〕

于〔气也。〕

只〔气也。〕

旃〔旃也、詩舍旃舍旃。〕

乃〔气也。〕

於〔鳥也。〕

己〔几也。〕

每〔本音梅、原田之貌、借爲上聲。〕

夫〔本丈夫也、借音扶。〕

其〔箕也。〕

豈〔鎧也。〕

員〔物數也、音云、詩聊樂我員。〕

與〔授也、語辭、借平聲。〕

承〔奉也、音懲、楚人語辭。〕

唯〔本上聲、乃唯諾之唯、借平聲。〕

害〔去聲、災也、借音曷、詩害澣害否。〕



凡語辭、惟哉乎兮于只乃有義、他竝假借。以語辭之類虛言難象、故因音而借焉。

右四十。

〔校異〕

a 於…叢書集成本、「而」に作る。

b 毛…叢書集成本、「手」に作る。

c 折…四庫全書本、「析」に作る。

d 也…叢書集成本、此の字無し。

e 气…叢書集成本、「乞」に作る。

f 只气也…叢書集成本、此の三字

が後の「於烏也」の後ろに入る。四庫全書本、此の三字無し。

g 己凡也…叢書集成本、此の三字無し。

〔注釈〕

(1) 原田之貌…『春秋左氏伝』(僖公二十八年)に「聽輿人之誦曰、原田每每、舍其舊而新是謀」(輿人の誦を聴くに、曰く、原田每每ばいばいたり、其の旧を舍めて新是れ謀れ、と)とあるのを踏まえる。

〔通釈〕

助字の仮借

序に曰く、文字とは象かたちである。およそ形象のあるものは、象かたちることができるので、それゆえ文字となる。形象のないものは、象かたちることができないので、文字とはならない。助字がこれである。助字の用法は多様だが、根本となる意が立てられているわけではなく、すべて仮借によるものである。

之「菌糸(の芽生え)」。

也「陰部(女性器)」。

云「雲」。

思「慮ること」。

邪「琅邪ろうがの地」。

焉「焉ゆ(の類)」。

惟「思ふこと」。

既「わずかな食物」。

盍「覆うこと」。

而「顔面（頬）の毛。」

須「髭。」

蓋「草による覆い。」

斯「（斧で）断つこと。」

然「燎く（燃える）。」

以「薏苡（ハトムギ）の実り。」

矣「箭鏃（やじり）。」

為「母猿。」

居「蹲る。」

且「子余の切、（供物を）薦める机。」

諸「弁じること。（また文末の語氣を表し、）『毛

詩』（邶風・日月）に「日居月諸」（日よ月

よ）とある。」

耳「人の耳。」

哉「発言の間（を表す語）。」

兮「語氣（がとどまること）。」

爾「花が咲き繁ること、『毛詩』（小雅・采薇）

に「彼の爾んなるは維れ何ぞ、維れ常の華」

とある。」

乎「語氣（が高く上がること）。」

于「語氣（が伸び広がること）。」

只「語氣（がとどまること）。」

旃「旃。（また指示語として、）『毛詩』（唐風・采芣苢）

に「旃を捨てよ旃を捨てよ」とある。」

乃「語氣（が出がたいさま）。」

於「鳥。」

己「机。」

每「もと音は梅で、原野（に草木が盛んに茂って

いるさま）。借りて上声となる。」

夫「もと丈夫（成年男子）。借りて音は扶（夫れ）。」

其「箕（穀物から塵や殻をあおり出す農具）。」

豈〔鎧。〕

員〔事物の数。音は云。（また文末の語氣を表し、

『毛詩』（鄭風・出其東門）に「聊か我と樂

しまん（聊樂我員）」とある。」

与〔授与すること。助字で、借りて平声（与<sup>か</sup>）。〕

承〔承<sup>ささ</sup>げ奉ること。で、音は懲。また楚人の助字。〕

唯〔もと上声で、唯<sup>いだく</sup>諾（はいと返事をする）こと〕

害〔去声で、災害。借りて音は曷<sup>く</sup>（害<sup>いず</sup>れ）。『毛

の「唯」。借りて平声（唯<sup>た</sup>だ）。〕

詩』（周南・葛覃）に「害<sup>いづ</sup>れを辭<sup>あら</sup>ひ害<sup>しか</sup>れを否<sup>しか</sup>ざ  
る」とある。〕

およそ助字のうち、ただ「哉」「乎」「兮」「于」「只」「乃」字には意があるが、その他はいずれも  
仮借である。助字の類は実態がなく象<sup>かたど</sup>りがたいために、音に拠<sup>よ</sup>つて借りている。

右、四十字。

#### 五音之借

宮〔本宮室之宮。〕

商〔本商度之商。〕

角〔本頭角之角。〕

徵〔本徵召之徵。〕

羽〔本羽毛之羽。〕

右五。

三詩之借

風「本風虫之風。」

雅「本烏鴉之鴉。」

頌「本顔容之容。」

右三。

右三詩五音皆聲也。聲不可象、竝因音而借焉。

〔校異〕

a 右三…底本・四庫全書本、此の二字が後の「竝因音而借焉」の後ろに入る。叢書集成本に拠つて改めた。

〔通釈〕

五音の仮借

宮「もと宮室の「宮」。」

角「もと頭の角つのの「角」。」

羽「もと羽毛の「羽」。」

右、五字

三詩の借字

風「もと風（が吹いて生まれる）虫の「風」。」

頌「もと顔容かおかたちの「容」。」

右、三字。

右の三詩、五音はみな声である。声は象かたどることができないので、いずれも音に拠つて借りている。

商「もと商度しょうたく（量り考えること）の「商」。」  
徵「もと徵召ちようしょう（徵し招くこと）の「徵」。」

雅「もと烏鴉からすの「鴉」。」

十日之借

甲「本戈甲。」

乙「本魚腸。」

丙「本魚尾。」

丁「本蠶尾。」

戊「本武也。」

己「本几也。」

庚「鬲也。」

辛「被罪也。」

壬「懷妊也。」

癸「草木實也。」

右十。

十二辰之借

子「人之子也。」

丑「手之械也。」

寅「膾也。」

卯「牖也。」

辰「未詳本義。」

巳「蛇屬也。」

午「未詳本義。」

未「木之滋也。」

申「持簡也。」

酉「酋也。」

戌「與戊戚同意。」

亥「豕屬也。」

右十二。

十日、十二辰、惟己亥有義、他竝假借、以日辰之類、皆虛意難象、故因音而借焉。

〔校異〕

a 右十二：底本・四庫全書本、此の三字が後の「故因音而借焉」の後ろに入る。叢書集成本に拠つて改めた。

b 十日：叢書集成本、「右十日」に作る。

〔通釈〕

十日（十干）の仮借

甲「もと戈と甲（の「甲」）。」

乙「もと魚の腸。」

丙「もと魚の尾。」

丁「もと蠶（の）の尾。」

戊「もと武器（戈）。」

己「もと机。」

庚「鬲。」

辛「罪せられること。」

壬「懷妊すること。」

癸「草木の実。」

右、十字。

十二辰（十二支）の仮借

子「人の子供。」

丑「手枷。」

寅「腹（しりぞ）けること。」

卯「牖（やう）戸（窓）。」

辰「原義は未詳。」

巳「蛇の類。」

午「原義は未詳。」

未「木が茂ること。」

申「竹簡を持つこと。」

酉「酒樽。」

戌「戌（ま）や戚（おほ）と同義。」

亥「豕（いのし）の類。」

右、十二字。

十日と十二辰のうち、ただ「己」「亥」には意があるが、その他はいずれも仮借である。十日、十二辰の類は、みな実態がなく象（かたど）りがたいために、音に拠って借りている。

方言之借

鯛<sup>1</sup>「之爲鯛、音胃、鯛陽、縣名。」

覃「之爲覃、上如字、下音剡、詩以我覃耜。」

咎「之爲咎、上如字、下音皐、皐陶字。」

獸「之爲獸、上音觸、下徂感切、昌獸也、昌蒲也。」

羹「之爲羹、上如字、下音郎、楚地名。」

穀「之爲穀、奴走切、楚人謂乳穀。」

枹「之爲枹、上必茅切、下音桴、鼓桴也。」

敦「之爲敦、音燾、禮每敦一几、又爲敦、音彫、詩敦弓。」

右九。

〔校異〕

a 音…叢書集成本、「聲」に作る。 b 桴…叢書集成本、「枹」に作る。

〔注釈〕

(1) 鯛之爲鯛音胄…『通志』(王樹民 点校『通志二十略』中華書局、一九九五年二月)は、「之爲鯛」を小字双行注とせず、「鯛之爲鯛」音胄「云々に作る。」「歌」字以下も同様。

(2) 皐陶…皐陶は、虞において法律、刑罰を定めた舜の名臣。「咎陶」「咎繇」とも書く。

(3) 右九…実際には八字が見えるのみ。『通志』仮借略も同様。

〔通釈〕

方言の仮借

鯛「が「鯛」となる。音は胄。鯛陽(今の安徽

歌「が「歌」となる。上の音は触。下は徂感の

省臨泉県)は、県名。」

切。昌歌、すなわち菖蒲のこと。」

覃「が覃となる。上は字の通り(覃ぶ、覃い)。

羹「が「羹」となる。上は字の通り(羹)。下

下は音は刻。『毛詩』(小雅・大田)に、「我が覃き耜を以てす」とある。」

は音は郎。楚の地名。」

咎とが「が」ことなる。上は字の通り（咎とが）。下は

音は皐。皐陶ことう（の「皐」字。）

枹ふ「が枹ふとなる。上は必茅の切（櫛なの木）。下は

音は桴。桴ふと鼓つづみ（の「桴」のこと。）

右、九字。

雙音竝義不爲假借

陶「陶冶、皐陶。」

駢「徒刀切、馬四歲曰駢、他彫切、馬三歲曰駢。」

枹「補訝切、枹也、白加切、收麥器。」

枸「音苟、枸杞、音矩、枳枸。」

校「古孝切、木囚也、巨教切、木蘭也。」

幃「所衙切、旂幅也、七消切、頭括髮。」

被「部委切、寢衣也、普義切、春秋傳、翠被豹舄。」

穀こく「が」ことなる。奴走の切。（『左伝』宣公

四年に）「楚人は乳を穀と謂う」とある。」

敦とん「が」とんとなる。音は燾と（覆おほう）。『周礼』（春

官・司几筵）に「毎に一几を敦とんふ」とある。

また「敦とん」となる。音は彫ちよう（美しい模様）。

『毛詩』（大雅・行葦）に「敦弓ちようきやう」とある。」

鵠「都聊切、隼類、陟交切、鵠鵠、鵠鵠。」

鷃とん「以照切、音遙、雉也。」

榮「永兵切、桐也、音營、屋榮。」

榘「知林切、禮射甲革、榘實、食甚切、桑實さう也。」

幅「音福、布帛之劑、音逼、行滕也。」

褱たい「音但、袒裼也、張彥切、后六服有褱衣。」

衿「居吟切、領也、其鳩切、結也。」



褻〔音袖、袂也、由救切、盛服也。〕

凡此之類、皆是也。

右三十

凡此借類、計五百九十八。

〔校異〕

a 切…叢書集成本、「引」に作る。 b 實…叢書集成本、「樞」に作る。 c 巨教…叢書集成本、「戸孝」に作る。四庫全書本、「戸教」に作る。 d 但…叢書集成本・四庫全書本、「袒」に作る。

〔注釈〕

(1) 后六服有禮衣…『周礼』天官・内司服「掌王后之六服、禮衣、揄狄、闕狄、鞠衣、展衣、緣衣、素沙」に見える「禮衣」を指すか。ただし「禮衣」は「禮衣」と別物である。『礼記』玉藻に「王后禮衣、夫人揄狄。君命屈狄、再命禮衣、一命禮衣」(王后は禮衣なり、夫人は揄狄なり。君は命ぜらるるに屈狄す、再命は禮衣なり、一命は禮衣なり)とある。

(2) 右三十…實際には十五字が見えるのみ。『通志』仮借略も同様。

(3) 計五百九十八…本誌二一三〇頁、「同音借義」よりの総計。ただし實際には五百十三字が見えるのみ。『通志』仮借略も同様。

〔通釈〕

二つの音で二つの意があるが仮借とはならないもの

陶〔陶冶。皐陶。〕

鵬〔都聊の切で、隼の類。陟交の切で、鶻雕(小鳩)、鵠鵠(八哥鳥)。〕

駢「徒刀の切で、馬が四歳のことをいう「駢」。

他彫の切で、馬が三歳のことをいう「駢」。

杷「補訝の切で、枋（取っ手）。白加の切で、麦

などをかき集める道具（竹杷）。」

枸「音は苟で、枸杞。音は矩で、枳枸。」

校「古孝の切で、囚人に枷をはめること。巨教の

切で、木で闌ること（柵）。」

幃「所銜の切で、旗幟の縁。七消の切で、頭髮を括ること（その頭巾）。」

被「部委の切で、寝衣。普義の切（肩掛け）。『春

秋左氏伝』（昭公十二年）に、「翠被豹舄（翡翠

の羽で作った肩掛けと豹の皮の靴）」とある」

褰「音は袖で、衣袂（そで）。由救の切で、立派

な身なり。」

およそこれらの類は、みなこれ（二つの音で二つの意があるが仮借とはならない文字）である。

鵠「以照の切（鵠）。音は遥で、雉。」

榮「永兵の切で、桐。音は營で、屋根の榮（両

端のそり上がった部分）。」

楯「知林の切（弓的）。『周礼』（夏官・司弓矢）

に「甲革・楯實（弓的）を射る」とある。

食甚の切で、桑の実。」

幅「音は福で、布帛を剤つこと（その幅）。音は

逼で、行賸（遠行の際に用いる脛あて）。」

襜「音は但で、祖褐（はだぬぐこと）。張彦の切

で、王后の六服の一である襜衣。」

衿「居吟の切で、衣領（えり）。其鳩の切で、（紐

などを）結ぶこと。」

右、三十字。      これら仮借の類は、合計、五百九十八字。

### 論急慢聲諸<sup>1)</sup>



急慢聲諸者、慢聲爲二、急聲爲一也。梵書謂二合聲、是矣。梵人尚音、有合二合三合四成聲者、華人尚文、惟存二合。詩序曰、聲成文謂之音。知聲有急慢、則發而爲文、抑揚合度、鏗鏘中節。箋釋之家、全不及此。至於語辭渾而無別、但取言中之義、不問句中之節。故柳宗元極論語辭之義、良由不知急慢之節、所以辭與句不當。如慢聲爲者焉、急聲爲旃、旃爲者焉之應。如者與之爲諸、而已之爲耳、之矣之爲只、者也之爲者、也者急聲爲也、嗚呼之爲嗚、噫嘻之爲嘻、皆相應之辭也。

#### 〔校異〕

a 由：叢書集成本・四庫全書本、「繇」に作る。      b 節：叢書集成本、「急」に作る。

#### 〔注釈〕

(1) 論急慢聲諸：以下「論遷革」(二七四頁)まで『通志』卷三五・六書略第五からの引用となる。

(2) 梵書謂二合聲：梵語(サンスクリット語)の表記に用いられるデーヴァナーガリー文字では、母音を挟まずに二つ以上の子音が続くときには原則として合字が使われ、  
 (mudhya) や  (stiya) など、最大四つの子音を伴う合字がある。

(3) 惟存二合：後文にいくつかの例が示される。また「之於」を「諸」、「何不」を「盍」とする類も、

これにあたるか。

(4) 柳宗元極論語辭之義…未詳。<sup>唐</sup>柳宗元は、本誌第一七号二八四頁参照。

### 〔通釈〕

#### 急慢の声の調和について

急慢の声の調和とは、二つの慢声が、一つの急声になることである。梵書の「二合声」というのが、これにあたる。梵人は音を尊んだので、合二、合三、合四といった合成された声があるが、華人は文を尊んだので、ただ二合（の声）があるのみである。「詩序」には、「情より発した」声が文彩いろどりとなつたものを音という」とあるが、声に急慢があるならば、（声は）発して文彩いろどりとなり、抑揚は調子を合わせ、楽器はそのリズムにあたるのが分かるだろう。しかし注釈者たちは、全くここに至るまで意識が及んでいない。語辭が渾然としていて分別がないところについては、ただ言中の意味をとるだけであつて、句中のリズムについては問わなかった。ゆえに柳宗元は極めて語辭の義を論じていながら、まことに急慢のリズムを知らないことによつて、語辭と句の理解が合していないのである。

例えば慢声で「者焉」となるものが、急声では「旃」となる。「旃」は「者焉」に対応しているのである。

（慢声の）「者与」が（急声で）「諸」となり、（慢声の）「而已」が（急声で）「耳」となり、（慢声の）「之矣」が（急声で）「只」となり、（慢声の）「者也」が（急声で）「者」となり、（慢声の）「也者」が急声で「也」となり、（慢声の）「嗚呼」が（急声で）「嗚」となり、（慢声の）「噫嘻」が（急声で）「嘻」となるのなども、みな対応している語辭である。

論高下聲諸「音讀附」

董正之董、亦爲督察之督者、東董凍督故也。改更之更、亦爲變革之革者、更梗更「去聲」革故也。伊之爲己「大誥曰、已予惟小子」、已之爲億「易曰、億喪貝、又曰、億無喪有事」、伊已意億故也。非之爲匪、匪之爲弗、非匪弗弗故也。販即盼者、攀販盼故也。倣類敬者、京倣敬故也。翻之爲反、庸之爲用、邪之爲也、之爲只者、竝此道也。而之爲爾、爾之爲汝、汝之爲若、于之爲於、於之爲與、與之爲與「音譽」、亦此道也。是皆一義之所起而發聲有輕重耳。乃若父雖甫音、讀若輔、道雖杜老切、讀若導、禮記大昕、昕音忻、讀若希、說文臚字音儒、讀若儒、罅字、特丁切、讀若亨。此爲音讀之別、無非聲之諧也。

〔校異〕

a 已…叢書集成本、「已」に作る。

b 已…叢書集成本、此の字無し。

c 盼…底本、「盼」に作る。叢書集

成本・四庫全書本に拠つて改めた。

d 丁…底本・四庫全書本、「一」に作る。叢書集成本に拠つて改めた。

〔注釈〕

(1) 東董凍督故也…「東」は端東の切、「董」は端董<sup>上</sup>の切、「凍」は端送<sup>去</sup>の切、「督」は端沃<sup>入</sup>の切。ここでは反切の上字、すなわち頭子音が共通である文字について論じられている。

(2) 更去聲…「更」は更<sup>めつた</sup>めるの意、「更」は更<sup>さ</sup>にの意となる。

〔通釈〕

高下の声の調和について「音読を附す」

董正の「董」字が、ときに督察の「督」字となるのは、「東」<sup>上</sup>「董」<sup>上</sup>「凍」<sup>去</sup>「督」<sup>入</sup>字（の頭子音がいずれ

も「端」だからである。改更の「更」字が、ときに変革の「革」字となるのは、「更」<sup>上</sup>。「梗」<sup>上</sup>。「更」<sup>去声</sup>「革」<sup>入</sup>字（の頭子音がいずれも「見」）だからである。「伊」字を「已」字とし『尚書』大誥に、「已」<sup>あゐ</sup>、予は惟れ小子とある、「已」字を「億」字とする『周易』（震・六二）に、「億」<sup>おほ</sup>いに貝を喪ふや（六五）「億」<sup>入</sup>いに有事を喪ふこと無しとあるのは、「伊」<sup>上</sup>「已」<sup>上</sup>「意」<sup>去</sup>「億」<sup>入</sup>字（の頭子音がいずれも「影」）だからである。「非」字が「匪」字となり、「匪」字が「弗」字となるのは、「非」<sup>上</sup>「匪」<sup>上</sup>「沸」<sup>去</sup>「弗」<sup>入</sup>（の頭子音がいずれも「非」）だからである。「販」字が「盼」字にあたるのは、「攀」<sup>上</sup>「販」<sup>上</sup>「盼」<sup>去</sup>字（の頭子音がいずれも「滂」）だからである。「倣」字が「敬」字に類するのは、「京」<sup>上</sup>「倣」<sup>上</sup>「敬」<sup>去</sup>字（の頭子音がいずれも「見」）だからである。「翻」字を「反」字とし（いずれも頭子音は「敷」）、「庸」字を「用」字とし（いずれも頭子音は「以」）、「邪」字を「也」字とし（いずれも頭子音は「以」）、「之」字を「只」字とする（いずれも頭子音は「章」）のも、全てこのやり方である。

「而」字を「爾」字とし、「爾」字を「汝」字とし、「汝」字を「若」字とし（以上いずれも頭子音は「日」）、「于」字を「於」字とし、「於」字を「与」字とし、「与」字を「与」<sup>去</sup>「音は譽」<sup>去</sup>字とするのも、全てこのやり方である。これらの字は、みな一つの義より起こったものであつて、発声に軽重があるだけである。

「父」字は、音は甫<sup>上</sup>であるが、輔<sup>上</sup>と読む。「道」字は、杜老<sup>上</sup>の切であるが、導<sup>去</sup>と読む。『礼記』（文王世子・祭義）の「大昕」<sup>だいしん</sup>の「昕」字は音は忻<sup>上</sup>であるが、希<sup>上</sup>と読む。『說文解字』に「孺」字の音は儒<sup>去</sup>とあるが、孺と読む。「罌」字は、特丁<sup>上</sup>の切であるが、亭<sup>上</sup>と読む。これらは音読の別であるが、声の調和でないものはない。

# 論諧聲之惑

左氏曰、止戈爲武。武非从止。凡止正齒耻之類从止。武从戈、从亼。从戈見其義、从亼見其聲。古文歌舞之舞作𠬞、振撫之撫作𠬞、廊廡之廡作亼、古竝从亼、今竝从無、於篆文亦从亼、則武之从亼、又何疑焉。若曰武有止戈義、又何必曰偃武乎。亼之與止、易得相紊。左氏所見止之訛、武於六書爲諧聲。武、戈類也。武之从亼、亦猶戰之从單「音善」、戮之从麥「音六」、戢之从耳「音緝」、戮之从癸、皆聲之諧也。禮記曰、祖者且也。祖非从且。凡置姐之類从且、徂祖之類从且。「音徂」、祖無且義。凡此之類、皆不識諧聲。

## 〔校異〕

a 且…四庫全書本、「且」に作る。 b 且…底本、四声点（上声）あり。四庫全書本、「且」に作る。

c 置姐…叢書集成本・四庫全書本、「置姐」に作る。 d 且…底本、四声点（上声）あり。叢書集成本・四

庫全書本、「且」に作る。 e 且…底本、四声点（平声）あり。

## 〔注釈〕

（1）禮記曰祖者且也…この一句に對し、たとえば鄭玄は「且、未定之辭」と注を附す。ここでは、「祖」字の「且」を「且く」等の意味として解釈することを批判し、「祖」字は「示」の形と「且」の音で構成された諧聲の字であることを論じる。

## 〔通釈〕

諧聲（形聲）の混乱について

『春秋左氏伝』（宣公三年）に、「止（止める）、戈（戦争）を「武」と為す」とあるが、「武」字は「止」より構成されるわけではない。およそ「止」「芷」「齒」「耻（恥）」字などは「止」より構成されるが、「武」字は「戈」と「亾（亡）」より構成される。「戈」より構成されることは「武」字の義として現われ、「亾」より構成されることは「武」字の声として現われている。古文では歌舞の「舞」を「習」字に作り、振撫の「撫」を「攷」字に作り、廊廡の「廡」を「廡」字に作り、すべて「亾」より構成されている。いまいずれも「無」より構成されているが、篆文ではみな「亾」より構成されているのである。「武」字が「亾」より構成されていることは、疑いなくことであろう。もし「武」字に「止」と「戈」の意があるならば、どうして偃武（戦を止める）などというのであろうか（「武」字に「止める」の意があるならば、わざわざ「偃す」とはいわないはずである）。「亾」と「止」とは、混同しやすい。『春秋左氏伝』に見えるのは（「亾」を）「止」に誤ったのであり、「武」字は六書においては諧声（「戈」が形、「亾」が声）となる。「武」は戈の類である。「武」字が「亾」より構成されるのは、「戦」字が「單」[音は善]より、「戮」字が「麥」[音は六]より、「戢」字が「耳」[音は緝]より、「戣」字が「癸」より構成されるようなもので、いずれも諧声である。『礼記』（檀弓上）に、「祖は且なり」とあるが、「祖」字は「且」（の意）から構成されるわけではない。「置」「姐」字などは「且」より構成され、「祖」「祖」字は「且」[音は徂]より構成されている。「祖」字に「且」の意はない。このような誤解の類は、すべて諧声を知らないものである。



左氏曰、反正爲乏。正無義也。正乃射侯之正「音征」、象其形焉。正「音征」以受矢、乏以藏矢、其義在此。或曰、反正爲𠂔「音沔」。𠂔蔽矢短牆也。正以受矢、𠂔以蔽矢。此亦反正爲乏之義。邪正之正無所象、故正用侯正「音征」之正、邪用琅邪之邪、竝協音而借。是爲假借之書也。韓子曰、自營爲ム「音私」。ム非自營之義也。ム於篆文作𠂔、象男子之勢、故又音鳥。𠂔與𠂔同「卽了字」。故ム勢下垂、了狀槌上、竝是象形之文。若乃自營之ム、與了絕之了、竝同音而借、亦爲假借之書。疊、古作𠂔、祭肉之積在器也。从宜、祭器也。从晶、象積肉之形。疊與豐同意、豐亦俎豆之衍者也。揚雄以疊爲古理官決罪、三日得其宜、乃行。故从三日、从宜、此亦爲不識象形者也、何用識奇字之多乎。能、象熊之形。許氏謂能、熊屬、則可矣。又曰賢能之能、何也。出、象花英之形。許氏謂象艸木益滋上出、亦可矣。又曰出進、何也。是皆惑象形於假借者也。三代之前、有左氏韓子、三代之後、有揚雄許慎、猶不達六書之義、況他人乎。

# 〔校異〕

a 象形…叢書集成本、「形象」に作る。 b 乏…叢書集成本、「之」に作る。 c 𠂔…叢書集成本、「𠂔」に作る。 d 也…叢書集成本、此の字無し。 e 𠂔…四庫全書本、「ム」に作る。 f 𠂔…四庫全書本、「𠂔」に作る。 g ム…四庫全書本、「𠂔」に作る。 h 疊…叢書集成本、「疊」に作る。 i 疊…叢書集成本、「疊」に作る。 j 衍…四庫全書本、「滿」に作る。 k 疊…叢書集成本、「疊」に作る。 l 艸…叢書集成本、「草」に作る。

# 〔注釈〕

(1) 揚雄以疊爲古理官決罪…『說文解字』に「揚雄說、以爲古理官決罪、三日得其宜乃行之。從晶從宜。」

「楊雄説に、以為らく古の理官は罪を決するに、三日にして其の宜しきを得て乃ち之を行ふ。晶に従ひ宜に従ふ。」とある。前漢楊雄は、本誌第二〇号一三一頁参照。

(2) 許氏：後漢許慎、本誌第一五号五九頁参照。

### 〔通釈〕

#### 象形の混乱について

『春秋左氏伝』宣公十五年に、「正を反する（「正」字を反転させる）を乏と為す」（反正為乏）とある。「正」字に意はなく、「正」は弓の的の中心「音は征」のことで、その形を象つたものである。「正」音は征」は矢を受けるが、「乏（矢防ぎ）」は矢（から身）を藏す。「反正為乏」の意はここにある。あるいは「正を反するを𠂔」音は𠂔」と為す」とある。「𠂔（𠂔）」は、矢（から身）を藏す背の低い土墾である。「正」は矢を受けるが、「𠂔」は矢（から身）を藏う。これがまた「反正為乏」の意である。邪正の「正」には象るところがなく、それゆえ「正」字は、「侯正（弓の的の中心）「音は征」の「正」を用いる。「邪」字が琅邪（地名）の「邪」を用いるのも、音になつて借りていたのである。これらは六書における仮借である。

『韓非子』（五蠹）には、「自ら營らすをム「音は私」と為す」とあるが、「ム」字には自營の意はない。

「ム」字は篆文ではムに作り、男性器を象り、それゆえまた音は鳥となる。「𠂔」字は「𠂔」字「すなわち「了」字のこと」と同じである。「ム」字は垂れ下がった性器であり、「了」字は槌き上がった形状であり、どちらも象形文字である。自營の「ム」と了絶の「了」は、どちらも音を同じくして借りており、また六書における仮借である。

「疊（疊）」字は、いにしえは「疊」字に作った。祭祀に用いる肉を器に積んださまである。「宜」より構成されるのは、祭祀に用いる器を表す。晶より構成されるのは、肉を積んだ形を象る。「疊」字と「豊（豊）」字とは同義であり、「豊」字はまた満杯の俎豆（祭器）のことである。揚雄は「疊」字を、古代の裁判官は、罪状を判決するのに、三日経ってその宜しきを得てから執行したため、三つの「日」より構成され、「宜」より構成されとしたが、これもまた象形を知らないものである。どうして珍奇な文字を多く知らねばならないなどということがあろうか。

「能」字は、熊の形を象る。許慎は「能は、熊の属」と述べており、それでよいのに、また賢能の「能」とも言うのはどうしてか。「出」字は、花房の形を象る。許慎は「艸木益ます滋り上り出づるを象る」と述べており、それでよいのに、さらに「出」は進であるとも言うのはどうしてか。これらはみな象形を假借と混乱してしまったものである。三代以前は左丘明や韓非、三代以後は揚雄や許慎ですら、六書の義には通達していなかった。まして他の人であれば、なおさらである。

### 論子母

立類爲母、從類爲子。母主形、子主聲、說文眼學、廣韻耳學。說文主母而役子、廣韻主子而率母。說文形也、體也、廣韻聲也、樂也。說文以母統子、廣韻以子該母。說文定五百四十類爲字母。然母能生、子不能生。今說文誤以子爲母者、二百十類。且如句類生拘鉤、肉類生桌桌、半類生脾叛、美類生僕僕。拘當入手類、鉤當

入金類、則句爲虚設。桌當入木類、𦵏當入米類、則肉爲虚設。胖當入肉類、叛當入反類、則半爲虚設。僕當入人類、𦵏當入臣類、則業爲虚設。蓋句肉半業皆子也。子不能生、是爲虚設。夾漈作象類書、總三百三十母、爲形之主。八百七十子、爲聲之主。合千二百文、而成無窮之字。故去許氏二百七、而取其三百三十也。

〔校異〕

a 母：叢書集成本・四庫全書本、此の字無し。 b ……叢書集成本、「業」に作る。 c 𦵏……底本、「桌」に作る。叢書集成本・四庫全書本に拠つて改めた。 d 七：叢書集成本・四庫全書本、「十」に作る。

〔注釈〕

(1) 廣韻……本誌第二〇号一三六頁参照。

(2) 夾漈作象類書……南宋鄭樵『通志』六書略を指す。これ以下「而取其三百三十也」まで、『通志』を踏まえて、書き改めた箇所と思われる。六書略はこの箇所を「此臣所以去其二百十、而取其三百三十也」と記す。

〔通釈〕

子母について

類を立てるには母（たる形に拠ること）とし、類に従うには子（たる音に拠ること）とする。母は形を主とし、子は声を主とする。『説文解字』は目（で形を見る）学であり、『広韻』は耳（で音を聞く）学である。『説文解字』では母（たる形）を主として子（たる音）を従わせ、『広韻』では子（たる音）を主として母（たる形）を従わせる。『説文解字』は形、体であり、『広韻』は声、がく楽である。『説文解字』は母（た

る形）によつて子（たる音）を統べ、『広韻』は子（たる音）によつて母（たる形）を兼ねる。『説文解字』は五百四十類を定めて字母となしている。これらは母（たる形）から生じ得たものだが、子（たる音）からは生じ得ないものである。しかしいま『説文解字』が誤つて子（たる音）を母（たる形）としているものは、二百十類ある。例えば「句」類に「拘」「鉤」字があり、「西（鹵）」類に「栗（臬）」「粟（臬）」字があり、「半」類に「胖」「叛」字があり、「業」類に「僕」「瞽」字がある。しかし「拘」字は「手」類に入れるべきであり、「鉤」字は「金」類に入れるべきであつて、「句」類とするのは間違いである。「栗」字は「木」類に入れるべきであり、「粟」字は「米」類に入れるべきであつて、「西」類とするのは間違いである。「胖」字は「肉」類に入れるべきであり、「叛」字は「反」類に入れるべきであつて、「半」類とするのは間違いである。「僕」字は「人」類に入れるべきであり、「瞽」字は「臣」類に入れるべきであり、「業」類とするのは間違いである。やはり「句」「西」「半」「業」はみな子（たる音）であり、子（たる音）からは生じ得ないのであるから、以上の説は間違いなのである。

鄭樵が著した類書では、三百三十の母をもつて形の主とし、八百七十の子をもつて声の主とした。併せて千二百に過ぎないが、それらは数限りない文字となる。それゆえ許慎の二百七を捨てて、鄭樵の三百三十を採ることとする。

對舊作對<sup>(1)</sup> 漢文以言多非誠、故去口。

疊舊作疊、新室<sup>(3)</sup>以三日太盛、改爲三田。

形影之影、舊作景。葛稚川加多於右。

尼丘之山、三倉<sup>(8)</sup>合而爲丘<sup>(7)</sup>「音尼」。

荒昏二義、元次山謚隋煬帝、合而爲醺<sup>(10)</sup>「音荒」。

鄭嫌近鄭、更而爲莫。幽嫌近幽、更而爲邠<sup>(12)</sup>。此竝唐明皇所更也。

〔校異〕

a 太：叢書集成本・四庫全書本、「大」に作る。

b 贛：叢書集成本、「贛」に作る。

c 而：叢書集成本

・四庫全書本、此の字無し。

〔注釈〕

(1) 漢文以言多非誠、故去口：『說文解字』に「對、或從士。漢文帝以爲責對而爲言多非誠對。故去其口以從士也」。「對、或いは士に從ふ。漢の文帝以爲らく、責對して言多しと爲すは誠對に非ず。故に其の口を去りて以て士に從ふなり」とある。

(2) 文帝以周齊不遑寧處、故去是：例えば『資治通鑑』卷一七五・陳紀八、<sup>南齊</sup>胡三省の注などには「太平元年、周閔帝受魏禪五主二十四年而亡。隋主本襲封隨公、故國號曰隋、以周齊不遑寧處、故去是作隋。以是訓走故也」。「太平元年、周の閔帝<sup>びんてい</sup>魏の禪を受くること五主二十四年にして亡ぶ。隋主本隨公<sup>もと</sup>を襲封す、故に國号を隋と曰ふ、周、齊の遑寧ならざる處を以ての故に、是を去りて隋に作る。是、走に訓

隋舊作隨、文帝以周齊不遑寧處、故去是。

瓢舊作騶、宋明以高「音喝」類禍、改而爲瓜。

軍陣之陣、舊作陳。王逸少去東从車。

章貢之水、後人合而爲贛<sup>(9)</sup>「音紺」。

鄣「火各切」、本一名。分而爲高邑者、漢光武也。

するを以ての故なり」とある。

- (3) 新室以三日太盛、改爲三田：『説文解字』に「亡新以為疊从三日太盛、改爲三田」「亡新に以為らく、疊三日の太だ盛んなるに従ふ、改めて三田と為す」とある。

- (4) 宋明以高類禍、改而爲瓜：『宋書』卷八・明帝本紀に「末年好鬼神、多忌諱。言語文書有禍敗兇喪及疑似之言應迴避者數百千品。有犯必加罪戮。改駟爲馬邊瓜、亦以駟字似禍字故也」「末年に鬼神を好み、忌諱多し。言語文書に禍敗兇喪及び疑似の言の応に迴避すべき者有ること數百千品。犯すこと有れば、必ず罪戮を加ふ。駟を改め馬邊の瓜と為すは、亦た駟字の禍字に似たるを以ての故なり」とある。

- (5) 葛稚川加多於右：例えば『顔子家訓』卷下・書証などに、「凡陰景者、因光而生、故即謂爲景。……至晉世葛洪字苑、傍始加多、音於景反」「凡そ陰景は、光に因りて生ず、故に即ち謂ひて景と為す。……晉の世 葛洪の字苑に至り、傍らに始めて多を加ふ、音於景の反」とある。

葛洪（二八三～三四三？／三六三？）、稚川は字。江蘇句容の人。神仙思想家として知られ、著に『抱朴子』内篇二十篇・外篇五十篇、『神仙伝』十卷などのほか、字書と思しき『要用字苑』一卷なる書があった。伝は『晋書』卷七二ほか、『抱朴子』外伝自叙に詳しい。

- (6) 王逸少去東从車：例えば『顔子家訓』卷下・書証などに、「陳、俗本多作阜傍車乗之車。按諸陳字、竝作陳鄭之陳。夫行陳之義、取於陳列耳、此六書爲假借也。蒼、雅及近世字書、皆無別字。唯王羲之小學章、獨阜傍作車」「陳は、俗本多く阜傍 車乗の車に作る。按ずるに諸陳字、並びに陳鄭の陳に作る。夫れ行陳の義、陳列を取るのみ、此れ六書 假借と為すなり。蒼、雅及び近世の字書、皆な別字無し。

唯だ王羲之の小学章のみ、独り阜傍車に作る」とある。

<sup>晋</sup>王羲之、逸少は字。中国書道史上、最も優れた書家の一人。本誌第二〇号一三四頁参照。著に『小学篇』一篇なる書があったとされる（ただし『隋書』経籍志には、王羲と称する別人の書とされる）。

(7) 尼丘…山東曲阜の東南にある山。孔子の父母がここに祈り、孔子が生まれたとされる。

(8) 三倉…<sup>宋</sup>始皇帝が小篆を正式書体として採用した際に著された、<sup>宋</sup>李斯『蒼頡』七章、<sup>宋</sup>趙高『爰歷』六章、<sup>宋</sup>胡毋敬『博学』七章の三書。もしくは『蒼頡』と<sup>前漢</sup>揚雄『訓纂』、<sup>前漢</sup>賈魴『滂喜』の三書を指す。

(9) 章貢之水…章水と貢水。江西贛州で合流し、<sup>かんしやう</sup>贛江となり長江に注ぐ。

(10) 元次山諡隋煬帝…元次山は、<sup>唐</sup>元結（七二三～七七二）。次山は字。湖北武昌の人。著に『元次山集』十二卷がある。伝は『新唐書』卷一四三など。その詩文中には、<sup>隋</sup>煬帝を諷諭して「荒王」（『元次山集』卷一「二風詩」、同卷二「説楚何荒王賦」）や「昏王」（同卷三「閔荒詩」）と呼称する箇所がある。

(11) 分而爲高邑者、漢光武也…『後漢書』卷一上・光武帝紀に「六月己未即皇帝位。……於是建元爲建武、大赦天下、改鄩爲高邑」（六月己未 皇帝の位に即く。……是に於て建元を建武と爲し、天下に大赦し、鄩を改めて高邑と爲す）とある。

(12) 此竝唐明皇所更也…『旧唐書』卷八・玄宗本紀に「（開元十三年二月）丙子、改豳州爲邠州、鄭州爲莫州、梁州爲褒州、沅州爲巫州、舞州爲鶴州、泉州爲福州、以避文相類及聲相近者」（丙子、<sup>ひん</sup>豳州を改めて邠州と爲し、鄭州を莫州と爲し、梁州を褒州と爲し、沅州を巫州と爲し、舞州を鶴州と爲し、泉



州を福州と爲すは、文の相類する及び声の相近き者を避くるを以てすればなり」とある。

〔通釈〕

（字体の）変更について

「対（對）」字は古くは「𡗗」字に作つたが、漢の文帝が言が多いのは不誠実であるとしたことにより、「口」を取り去つた。

「隋」字は古くは「隨」字に作つたが、隋の文帝が周・齊（北周・北齊）に安らぎがないとしたことによつて、「辵（走）」を取り去つた。

「疊」字は古くは「疊」字に作つたが、王莽の新朝では三つの「日」から構成されるのは盛大過ぎるとして、「日」を改めて「田」とした。

「𨔵」字は古くは「𨔵」字に作つたが、劉宋の明帝が𨔵「音は𨔵」をもつて禍に類するとしたので、「𨔵」を改めて「瓜」とした。

形影の「影」は、古くは「景」字に作つたが、葛洪が「彡」を右側に加えた。

軍陣の「陣」は、古くは「陳」字に作つたが、王羲之が「東」を取り去り「車」から構成されるようにした。

尼丘の山は、『三倉』では合して「𡗗」〔音は尼〕となつていた。

章水と貢水は、後人が合して「𡗗」〔音は紺<sup>五</sup>〕となつた。

「荒」「昏」の二字は、元結が隋の煬帝に諡して、合して𡗗〔音は荒〕となつた。

「鄣」「火谷<sup>●人</sup>の切」字は、もと一字だが、分かれて高邑としたのは、漢の光武帝である。  
「鄭」字は「鄭」字に字形が近いことを嫌われ、「莫」字に改められた。「幽」字は「幽」字に字形が近いことを嫌われ、「邠」字に改められた。これらはいずれも唐の玄宗が改めたものである。

#### 論遷革

雅、本鴉字。今復有鴉字、遂以雅爲雅頌之雅。後人不知本音鴉字。

雇、本九<sup>レ</sup>雇之雇、借爲雇賃之雇、今復有雇字。後人不知本爲雇也。

頌、本顏容、借爲歌頌之頌。今人見頌、知爲歌頌之頌而已、安知本是容。

泉、本貨錢之錢、故於篆象古刀文、借爲泉水之泉。今人見泉、知爲泉水之泉而已、安知本爲錢字。

#### 〔校異〕

a 音鴉…叢書集成本、「爲雅」に作る。四庫全書本、「音雅」に作る。 b 雇…叢書集成本・四庫全書本、「雇」に作る。  
c 顏容…叢書集成本、「顏容之容」に作る。 d 容…叢書集成本、「容字」に作る。

#### 〔注釈〕

(1) 九雇…農事を司る古の官名、九雇に同じ。『春秋左氏伝』昭公十七年に「九雇爲九農正、雇民無淫者也」〔九雇を九農正と爲す、民を雇<sup>と</sup>めて淫すること無からしむる者なり〕とある。

#### 〔通釈〕

# 文字の変遷について

「雅」字は、もと「鴉」字。今また「鴉」字があり、「雅」字は（『毛詩』の風）雅頌の「雅」の意となる。後人はもと（「雅」字の）音が「鴉」であつたことを知らないからである。

「雇」字は、もと九鴈の「鴈」だが、借りて雇賃の「雇」となつた。今また「鴈」字があるのは、後人は（「雇」字が）もと「鴈」であつたのを知らないからである。

「頌」字は、もと顔容（の「容」）だが、借りて歌頌の「頌」となつた。いま人は「頌」字を見ると、歌頌の「頌」だと知るのみで、どうしてもと「容」字であつたと分かつるか。

「泉」字は、もと貨錢の「錢」で、それゆえ篆書では古の刀の文様を象るが、借りて泉水の「泉」となつた。いま人は「泉」字を見ると、泉水の「泉」だと知るのみで、どうしてもと「錢」字であつたと分かつるか。

徐鉉奏俗書譌謬、不合六書之體者、二十九字。

鹽。个。暮。熟。捧。遨。迴。腰。鳴。慾。揀。俸。影。斌。悦。藝。  
著。墅。蓑。蹟。贅。黠。慶。池。徘徊。鞦韆。矗。

〔校異〕異同無し。

〔注釈〕

(1) 徐鉉奏：以下<sup>北宋</sup>太宗の勅命を受けて、<sup>北宋</sup>徐鉉が校訂した『說文解字』（いわゆる大徐本）の末尾に載せる。徐鉉は、本誌第二〇号一三七頁参照。

〔通釈〕

徐鉉が奏上した、俗書が誤っていて、六書の体に合っていない二十九字。

𡗗。个。暮。熟。捧。遊。迴。腰。鳴。慾。揀。俸。影。斌。悅。藝。  
著。墅。蓑。蹟。贅。𧇖。麋。池。徘徊。鞦韆。蠹。

字音正譌〔用說文切〕

車〔尺遮切。〕	軻〔康我切。〕	輔〔扶雨切。〕	治〔平聲。〕	濟〔子禮切。〕
洗〔蘇典切。〕	洒〔先禮切。〕	溺〔而灼切。〕	汶〔亡運切。〕	浣〔胡玩切。〕
灑〔山鼓切。〕	泌〔兵媚切。〕	漚〔烏侯切。〕	湛〔宅減切。〕	他。〔徒河切。〕
儻〔平聲。〕	譏〔此緣切。〕	謾〔母官切。〕	訂〔他頂切。〕	諄〔蒲沒切。〕
它〔託何切。〕	柩〔巨救切。〕	恃〔時止切。〕	鋪〔普胡切。〕	錢〔卽淺切。〕
蕩〔徒朗切。〕	頃〔去營切。〕	峙〔直离切。〕	婢〔便俾切。〕	婦〔房九切。〕
母〔莫后切。〕	靄〔於蓋切。〕	掃。〔蘇老切。〕	在〔昨代切。〕	煥〔烏到切。〕
煖〔況袁切。〕	罷〔薄蟹切。〕	陞〔旁禮切。〕	附〔符又切。〕	酢〔倉故切。〕

醋	〔在各切。〕	打	〔都挺切。〕	擠	〔子計切。〕	挂	〔古賣切。〕	摘	〔他歷切。〕
擲	〔尼革切。〕	唯	〔以水切。〕	壽	〔直由切。〕	啞	〔於革切。〕	趨	〔直离切。〕
料	〔洛蕭切。〕	事	〔鉏史切。〕	賈	〔公戶切。〕	号	〔胡到切。〕	號	〔乎刀切。〕
核	〔古哀切。〕	槩	〔自琰切。〕	梭	〔私閭切。〕	盼	〔胡計切。〕	散	〔蘇肝切。〕
盼	〔匹莧切。〕	腥	〔蘇佞切。〕	節	〔簿口切。〕	霸	〔普伯切。〕	字	〔蒲妹切。〕
曾	〔昨稜切。〕	過	〔古禾切。〕	造	〔七到切。〕	紹	〔市沼切。〕	緯	〔云貴切。〕
紂	〔上聲。〕	繆	〔平聲。〕	館	〔古玩切。〕	効	〔胡概切。〕	草	〔自保切。〕
予	〔余呂切。〕	能	〔奴來切。〕	示	〔音祈。〕	豈	〔苦亥切。〕	弟	〔特計切。〕
探	〔它含切。〕	儒	〔人朱切。〕	髻	〔直追切。〕	燄	〔以冉切。〕	扣	〔苦后切。〕
不	〔方久切。〕	負	〔房九切。〕	早	〔乎肝切。〕	嘆	〔呼肝切。〕	統	〔去聲。〕
篠	〔徒弔切。〕	聚	〔才句切。〕	噫	〔於介切。〕	紊	〔亡運切。〕	簞	〔徒念切。〕
溪	〔胡計切。〕	尿	〔奴弔切。〕	唸	〔伊昔切。〕	副	〔芳逼切。〕	假	〔古領切。〕
泉	〔古錢字。〕	創	〔楚良切、作瘡非。〕	撼	〔胡感切、作撼非。〕	嬾	〔奴困切、作嫩非。〕		

〔校異〕

a 他：叢書集成本・四庫全書本、「淹」に作る。 b 掃：叢書集成本、「埽」に作る。 c 挺：叢書集成本・四庫全書本、「捉」に作る。 d 由：叢書集成本・四庫全書本、「繇」に作る。 e 趨：叢書集成本・四庫全書本、「趨」に作る。 f 琰：叢書集成本、「刻」に作る。 g 盼匹莧切：叢書集成本、此の四字が後

ろの「霸普伯切」の前に入る。 h 保…叢書集成本、「葆」に作る。 i 字…叢書集成本・四庫全書本、「切」に作る。 j 孃…叢書集成本・四庫全書本、「嫗」に作る。

〔注釈〕

(1) 説文切…<sup>北宋</sup>徐鉉の手による『説文解字』（いわゆる大徐本）に引く反切のこと。この反切は、<sup>隋</sup>陸法言『切韻』を補正し編纂した<sup>唐</sup>孫愐『唐韻』のものに拠っているという。

〔通釈〕

字音の誤りを正す 『説文解字』の反切を用いる。』

車	〔尺遮 <sup>○</sup> の切。〕	軻	〔康我 <sup>●</sup> の切。〕	輔	〔扶雨 <sup>●</sup> の切。〕	治	〔平声。〕	濟	〔子礼 <sup>●</sup> の切。〕
洗	〔蘇典 <sup>●</sup> の切。〕	洒	〔先礼 <sup>●</sup> の切。〕	潮	〔而灼 <sup>●</sup> の切。〕	汶	〔亡運 <sup>●</sup> の切。〕	浣	〔胡玩 <sup>●</sup> の切。〕
灑	〔山豉 <sup>●</sup> の切。〕	泌	〔兵媚 <sup>●</sup> の切。〕	漚	〔烏侯 <sup>●</sup> の切。〕	湛	〔宅減 <sup>●</sup> の切。〕	他	〔徒河 <sup>●</sup> の切。〕
儻	〔平声。〕	課	〔此縁 <sup>●</sup> の切。〕	謾	〔母官 <sup>○</sup> の切。〕	訂	〔他頂 <sup>●</sup> の切。〕	諄	〔蒲没 <sup>●</sup> の切。〕
它	〔託何 <sup>○</sup> の切。〕	柩	〔巨救 <sup>●</sup> の切。〕	恃	〔時止 <sup>●</sup> の切。〕	鋪	〔普胡 <sup>○</sup> の切。〕	錢	〔即淺 <sup>●</sup> の切。〕
蕩	〔徒朗 <sup>●</sup> の切。〕	頃	〔去營 <sup>○</sup> の切。〕	峙	〔直离 <sup>○</sup> の切。〕	婢	〔便俾 <sup>●</sup> の切。〕	婦	〔房九 <sup>●</sup> の切。〕
母	〔莫后 <sup>●</sup> の切。〕	靄	〔於蓋 <sup>●</sup> の切。〕	掃	〔蘇老 <sup>●</sup> の切。〕	在	〔昨代 <sup>●</sup> の切。〕	燠	〔烏到 <sup>●</sup> の切。〕
煖	〔況袁 <sup>○</sup> の切。〕	罷	〔薄蟹 <sup>●</sup> の切。〕	陞	〔旁礼 <sup>●</sup> の切。〕	附	〔符又 <sup>●</sup> の切。〕	酢	〔倉故 <sup>●</sup> の切。〕
醋	〔在各 <sup>●</sup> の切。〕	打	〔都挺 <sup>●</sup> の切。〕	擠	〔子計 <sup>●</sup> の切。〕	挂	〔古壳 <sup>●</sup> の切。〕	摘	〔他歷 <sup>●</sup> の切。〕
擲	〔尼革 <sup>●</sup> の切。〕	唯	〔以水 <sup>●</sup> の切。〕	寿	〔直由 <sup>○</sup> の切。〕	啞	〔於革 <sup>●</sup> の切。〕	趁	〔直离 <sup>○</sup> の切。〕

料	〔洛蕭 <sup>○</sup> の切。〕	事	〔鉏史 <sup>●上</sup> の切。〕	賈	〔公戸 <sup>●上</sup> の切。〕	号	〔胡到 <sup>●去</sup> の切。〕	号	〔乎刀 <sup>○</sup> の切。〕
核	〔古哀 <sup>○</sup> の切。〕	槩	〔自琰 <sup>●上</sup> の切。〕	梭	〔私閏 <sup>○</sup> の切。〕	盼	〔胡計 <sup>●上</sup> の切。〕	散	〔蘇吁 <sup>●去</sup> の切。〕
盼	〔匹莫 <sup>●去</sup> の切。〕	腥	〔蘇佞 <sup>●去</sup> の切。〕	節	〔簿口 <sup>●上</sup> の切。〕	霸	〔普伯 <sup>●去</sup> の切。〕	字	〔蒲妹 <sup>●去</sup> の切。〕
曾	〔昨稜 <sup>○</sup> の切。〕	過	〔古禾 <sup>○</sup> の切。〕	造	〔七到 <sup>●去</sup> の切。〕	紹	〔市沼 <sup>●上</sup> の切。〕	緯	〔云貴 <sup>●去</sup> の切。〕
紂	〔上声。〕	繆	〔平声。〕	館	〔古玩 <sup>●去</sup> の切。〕	効	〔胡概 <sup>●去</sup> の切。〕	草	〔自保 <sup>●上</sup> の切。〕
予	〔余呂 <sup>●上</sup> の切。〕	能	〔奴來 <sup>○</sup> の切。〕	示	〔音は祈。〕	豈	〔苦亥 <sup>●上</sup> の切。〕	弟	〔特計 <sup>●上</sup> の切。〕
探	〔它含 <sup>○</sup> の切。〕	儒	〔人朱 <sup>○</sup> の切。〕	髻	〔直追 <sup>○</sup> の切。〕	焰	〔以冉 <sup>●去</sup> の切。〕	扣	〔苦后 <sup>●上</sup> の切。〕
不	〔方久 <sup>●上</sup> の切。〕	負	〔房九 <sup>●上</sup> の切。〕	早	〔乎吁 <sup>●去</sup> の切。〕	嘆	〔呼吁 <sup>●去</sup> の切。〕	統	〔去声。〕
篠	〔徒弔 <sup>●去</sup> の切。〕	聚	〔才句 <sup>●去</sup> の切。〕	噫	〔於介 <sup>●去</sup> の切。〕	紊	〔亡運 <sup>●去</sup> の切。〕	簞	〔徒念 <sup>●去</sup> の切。〕
傒	〔胡計 <sup>●上</sup> の切。〕	尿	〔奴弔 <sup>●去</sup> の切。〕	唼	〔伊昔 <sup>●入</sup> の切。〕	副	〔芳逼 <sup>●入</sup> の切。〕	仮	〔古額 <sup>●入</sup> の切。〕
泉	〔古は「錢 <sup>○</sup> 」字。〕			創	〔楚良 <sup>○</sup> の切、「瘡 <sup>○</sup> 」字に作るの誤り。〕				
撼	〔胡感 <sup>●上</sup> の切、「撼 <sup>●上</sup> 」字に作るの誤り。〕			嫵	〔奴困 <sup>●去</sup> の切、「嫵 <sup>●去</sup> 」字に作るの誤り。〕				

部位雜記

折	〔艸部。〕	卒	〔衣部。〕	阜	〔古草爲阜。〕	嗟	〔言部善。〕	於	〔古文烏字。〕
苻	〔合从竹。〕	葦	〔卽期字。〕	叩	〔元扣。〕	砮	〔元从山。〕	服	〔元从舟。〕

柴「棼」。

拒「本矩字止部。」 糕「説文从禾、玉篇从禾从示。」 菟「説文作𪔐、虎部。」

菟「説文無、玉篇有。」

妙「本妙、説文弦部、玉篇妙部。」

乞「古气字、借入聲。」

〔校異〕

a 𪔐…底本、「虎」に作る。叢書集成本・四庫全書本に拠つて改めた。 b 弦部…底本、「女弦部」に作る。四庫全書本、「在弦部」に作る。叢書集成本に拠つて改めた。 c 妙…叢書集成本、「女」に作る。

〔注釈〕

(1) 玉篇…<sup>\*</sup>顧野王『玉篇』三十卷、また三十一卷。本誌第二〇号一三五頁参照。

〔通釈〕

部位に関する雜記

折「艸部である。」

卒「衣部である。」

阜「古は「草」字を「阜」とした。」

嗟「言部であり、「誓」字（に同じ）。」

於「古の文字では「鳥」字である。」

苻「合して「竹」から構成される。」

基「期」字である。」

叩「もと「扣」字である。」

砮「もと「山」から構成される。」

服「もと「舟」から構成される。」

柴「棼字（に同じ）。」

拒「もと「矩」字、止部である。」

糕「『説文解字』では「禾」から構成される。『玉篇』では「禾」と「示」から構成される。」

菟「『説文解字』では「𪔐」字に作る。虎部である。」



蕙『説文解字』には載せず、『玉篇』に載せる。」

妙「もと」「妙」字。『説文解字』では「弦」部に載せ、『玉篇』では「妙」部に載せる。」  
乞「古は「气」字、借りて入声となる。」

點畫譌舛〔本文（底本）画像〕

牛言言音音トト角角竹竹丹井井井矢矢之之出出  
生主宏突突偏偏使使欠欠頁頁包壺壺才手糸糸  
恒恒力力下下肩左左右右令令人人入入比比丘丘止止氷氷  
少少小小川川王王王王雅雅非非鷹鷹犬犬非非今今イ

〔校異〕四庫全書本は、左記の通り。叢書集成本は、「卜」「角」「壺」「令」「玉」「王」字のみを載せ、以下「缺三十二字」とする。

元	卯	貴
母	卯	用
梁	酉	用
梁	酉	之
倉	深	周
倉	稽	殷
軌	稽	哉
軌	縣	哉
西	縣	廳
冠	既	
寇	既	
段	為	
段	為	
清	泰	
清	穀	
亡	吳	
歲	吳	
歲	黃	

〔通釈〕

筆画の誤り。

〔ここでは筆画の正誤が論じられている。先に正しい字画が示され、後に小字注もしくは小字双行注で誤った字画が示されている。〕

朱子答楊元範有云、大有<sup>(1)</sup>享<sup>(2)</sup>享二字、據說文<sup>(3)</sup>只是一字、故易中多互用。亨、如王用亨于岐山、亦當爲享、如王用享于帝之云也。字書音韻、是經中淺事、故先儒得其大者、多不留意。然不知如此等處、不理會、却枉費了無限辭說、牽補而卒不得其本義、亦甚害事也。非但易學、凡經之說、無不如此。獨恨早衰、無精力整頓得耳。

〔校異〕

a 是：叢書集成本、「説」に作る。

〔注釈〕

(1) 朱子答楊元範：『朱文公文集』卷五〇・合楊元範。楊元範は、<sup>南宋</sup>楊大法。元範は字。浙江武義の人。著に『易説』があつたようで、<sup>南宋</sup>朱熹は右の書簡において、この書について論駁している。伝は『宋元学案補遺』卷四九。

(2) 大有亨享二字：『周易』大有には「九三、公用亨于天子、小人弗克」「九三、公用て天子に亨す、小人 克<sup>あた</sup>はず」とあるが、『春秋左氏伝』僖公二十五年には「筮之、遇大有<sup>䷍</sup>之睽<sup>䷥</sup>」。曰、吉。遇公用亨于天子之卦」「之を筮<sup>せ</sup>して、大有<sup>䷍</sup>の睽<sup>けい</sup>に之<sup>ゆ</sup>くに遇ふ。曰く、吉なり。公用て天子に亨すの卦に遇ふ」と、同箇所を引きながら「亨」を「享」に作る。

(3) 據説文只是一字：『説文解字』には「享」字を載せず、ただ「亯(享の異体字)」字を載せるのみ。〔通釈〕

朱子が楊大法に答えた書簡にいう。「大有卦(九三)には「亨」と「享」の二字(に作るもの)があるが、『説文解字』に拠れば、ただ「亯(享)」の一字があるのみであり、それゆえ『周易』の中では多く両字が互用されている。「亨」字は、例えば升卦(六四)に「王用て岐山<sup>きざん</sup>に亨す」と見えるが、これは(益卦・六二)「王用て帝に亨す」のように、「享」字とすべきである。字書や音韻などは、經書の中の小事に過ぎず、それゆえ先儒はその大まかなことを理解すれば、ほとんど意を留めなかった。けれどもこれらを知らず、

取り組んでおかなければ、かえつて際限なく言辞の説に力を費やし、後で取り繕つても最終的には本旨を得ることはできない。その害たるや甚だしい。『周易』の学のみならず、諸経書の説についても、このようなものである。ただ若くして衰え、精力が整わないことを恨むのみである。」

# 字學

説文 爾雅 字説<sup>(1)</sup> 字林<sup>(2)</sup> 三蒼<sup>(3)</sup> 呉楚音辨<sup>(4)</sup> 呂靖韻集<sup>(5)</sup> 夏侯該韻略<sup>(6)</sup> 楊休之韻略<sup>(7)</sup>

周思言音韻<sup>(8)</sup> 李季節音譜<sup>(9)</sup> 杜臺卿韻略<sup>(10)</sup> 玉篇<sup>(11)</sup> 唐韻<sup>(12)</sup> 丁度集韻<sup>(13)</sup>

# 唐藝文志

音隱<sup>(14)</sup> 音略<sup>(15)</sup> 音義<sup>(16)</sup> 音訓<sup>(17)</sup> 音鈔<sup>(18)</sup> 釋音<sup>(19)</sup> 辨證<sup>(20)</sup> 辨疑<sup>(21)</sup> 辨嫌<sup>(22)</sup> 辨惑<sup>(23)</sup> 辨字<sup>(24)</sup> 注辨<sup>(25)</sup>

論字説<sup>(26)</sup> 三顧隱蕭楚<sup>(27)</sup> 「字子荊、號清節先生」

〔校異〕 異同無し。

# 〔注釈〕

(1) 字説…<sup>北宋</sup>王安石『字説』二十卷、のち増補して二十四卷。本誌第二〇号一三六頁参照。

(2) 字林…<sup>晋</sup>呂忱『字林』七卷。本誌第一五号五九頁参照。

(3) 三蒼…既出。一七二頁、注釈(8)参照。

(4) 呉楚音辨…未詳。

(5) 呂靖韻集…おそらく<sup>晋</sup>呂靜『韻集』五巻を指す。『韻集』は、<sup>隋</sup>陸法言『切韻』序に見えるいわゆる「五家韻書」(呂靜『韻集』、夏侯詠『韻略』、陽休之『韻略』、李季節『音譜』、杜台卿『韻略』)の一。宮、商、角、徵、羽の五音によつて分類されていたらしい。すでに佚して伝わらないが、その佚文を集めたものが『小学鉤沈』や『玉函山房輯佚書』などに見える。なお呂靜は、『字林』の撰者である<sup>晋</sup>呂忱の弟にあたる。

(6) 夏侯詠韻略…おそらく夏侯詠『四声韻略』十三巻を指す。いわゆる「五家韻書」の一。いまは佚して伝わらず、その詳細は分からない。

(7) 楊休之韻略…おそらく<sup>北齊</sup>陽休之『韻略』一巻を指す。いわゆる「五家韻書」の一。すでに佚して伝わらないが、その佚文を集めたものが『小学鉤沈』や『玉函山房輯佚書』などに見える。

陽休之(五〇九〜五八二)は、字は子烈。河北無終の人。他に『弁嫌音』二巻の書がある。伝は、『北齊書』巻四二、『北史』巻四七など。

(8) 周思言音韻…周思言『音韻』。いわゆる「五家韻書」とともに、『切韻』序にその名が見える(ただし陳寅恪「從史実論切韻」に指摘があるように、敦煌文書の殘巻などに「周思言音韻」は見えず、おそらく後人の訛増によるものと思われる)。いまは佚して伝わらず、その詳細は分からない。

(9) 李季節音譜…李季節『音譜』。いわゆる「五家韻書」の一。また『音譜決疑』とも称されていたようである。いまは佚して伝わらず、その詳細は分からない。

(10) 杜臺卿韻略…<sup>隋</sup>杜台卿『韻略』。いわゆる「五家韻書」の一。いまは佚して伝わらず、その詳細は分

からない。

杜台卿は、字は少山。河北曲陽の人。著に『玉燭宝典』十二卷、『齊記』二十卷などの書がある。伝は『隋書』卷五八など。

(11) 玉篇…既出。一八〇頁、注釈(1)。また本誌第二〇号一三五頁参照。

(12) 唐韻…<sup>唐</sup>孫愐『唐韻』。本誌第二〇号一三五頁参照。

(13) 丁度集韻…<sup>北宋</sup>丁度『集韻』十卷。本誌第一七号二七八頁参照。

(14) 音隱…『說文音隱』四卷。『旧唐書』『新唐書』いずれにも載せるが、詳細は不明。

(15) 音略…<sup>隋</sup>顏敏楚『証俗音略』一卷、また二卷。『旧唐書』『新唐書』いずれにも載せるが、詳細は不明。

顏敏楚は、山東臨沂の人。<sup>隋</sup>顏之推の次子。他に『俗書証誤』の書があり、いま『說郛』卷八五下に載せる。

(16) 音義…<sup>唐</sup>玄宗『開元文字音義』二十五卷、また三十卷。あるいは諸經書、史書等の音義を指すか。

(17) 音訓…未詳。あるいは、<sup>後漢</sup>服虔『漢書音訓』一卷を指すか。

(18) 音鈔…未詳。あるいは、孔文祥『漢書音義鈔』二巻を指すか。

(19) 釋音…未詳。

(20) 辨證…未詳。あるいは、『春秋弁証明經論』六巻を指すか。

(21) 辨疑…未詳。

(22) 辨嫌…<sup>北宋</sup>陽休之『弁嫌音』二巻。あるいは、彭立『文字弁嫌』一卷を指すか。

(23) 辨惑…未詳。あるいは、<sup>唐</sup>李善『漢書弁惑』二十卷、『文選弁惑』十巻を指すか。

(24) 辨字…戴規『弁字』一卷。『旧唐書』『新唐書』いずれにも載せるが、詳細は不明。

(25) 注辨…未詳。あるいは、<sup>唐</sup>張籍『論語注弁』二巻を指すか。

(26) 論字說…未詳。あるいは、<sup>北宋</sup>王安石『字說』について論じた書か。

(27) 三顧隱客蕭楚…<sup>南宋</sup>蕭楚(一〇六〇〜一一三〇)は、字は子荊、号は三顧隱客、清節先生と称された。

江西廬陵の人。著に『春秋經弁』十巻がある。ここで蕭楚の名が挙げられている意図は未詳。

〔通釈〕

文字学 (に關する書物)

『說文解字』

『爾雅』

『字說』

『字林』

『三蒼』

『吳楚音弁』

呂靜『韻集』

夏侯詠『四声韻略』

陽休之『韻略』

周思言『音韻』

李季節『音譜』

杜台卿『韻略』

『玉篇』

『唐韻』

丁度『集韻』

『唐書』芸文志 (に載せる文字学に關する書物)

『說文音隱』

『証俗音略』

『開元文字音義』

『音訓』

『音鈔』

『釈音』

『弁証』

『弁疑』

『弁嫌音』(『文字弁嫌』)

『弁惑』

『弁字』

『注弁』

『論字說』

蕭楚、(号は)三顧隱客。「字は子荊、清節先生と称される。」

# 象形

日、从口、从一、陽數。月、有盈虧、從口而闕之、从二而反陰、數遡於陽而不得其正也。田、象四

口、十阡陌之制。卜、象龜兆從橫。𠂔、從五畫直下、象其枚數、中有聯綴。王氏只以字爲象形、非

也。乃、氣生出之難。公羊曰、乃、難辭也。中、象物初出、有枝莖。

## 〔校異〕

a 口：叢書集成本・四庫全書本、「日」に作る。b 反：底本、「仄」に作る。叢書集成本・四庫全書本に

拠つて改めた。𠂔：叢書集成本・四庫全書本、「𠂔」に作り、その下に「古冊」の小字双行注が入る。

d 中：叢書集成本・四庫全書本、此の字無し。e 中：叢書集成本・四庫全書本、「𠂔」に作る。

## 〔注釈〕

(1) 王氏：北宋王安石『字說』（本誌第二〇号一三六頁参照）を指すか。

(2) 公羊曰乃難辭也：『春秋公羊伝』宣公八年に「而者何。難也。乃者何。難也。曷爲或言而、或言乃。

乃難乎而也」(而とは何ぞや。難きなり。乃とは何ぞや。難きなり。曷爲れぞ或いは而と言ひ、或いは

乃と言ふ。乃は而よりも難きなり)とある。

## 〔通釈〕

### 象形

「日」字は、「口」より構成され、「一」より構成される。陽数である。

「月」字は、満ち欠けがあるので、「口」より構成されるが欠けているところ(下の横棒)があり、「二」



より構成されるが陰にそむき、その数は陽に遡ろうとするのだが正を得ることはできない。

「田」字は、四つの「口」に象り、「十」は阡陌（あぜ道）のかたち。

「ト」字は、亀甲（を焼いた際に生じる占い）の兆しの縦横（のひび割れ）に象る。

「冊」（冊）字は、真下に伸びる五本の縦棒より構成される。木簡を綴り合わせたさまに象る。王安石が字形によって象形としているのは、間違いである。

「乃」字は、氣が生まれ出がたいことである。『春秋公羊伝』では「乃」字を、困難なさまを表す言辭としている。

「中」字（芽生える）は、植物が初めて生じ、枝茎のあることを象る。

指事 直著其事、視而可知也。

人目爲見。

鼻臭爲𦣻。

兩戸相向爲門。

兩手丁爲拜「丁古下字」。

土木示爲社「古社字」。

矢耳爲𦣻「以矢貫耳」。

刀耳爲聑。

王居門爲閤。

〔校異〕

a 示…叢書集成本、「視」に作る。

b 𦣻…叢書集成本は、「𦣻」に作る。

〔通釈〕

指事 直接に事物を表しており、見れば分かるもの。

人が目でみることを「見」とする。

二つの戸が向かいあっているのを「門」とする。

鼻でにおいをかぐことを「𦵏」（𦵏ぐ）とする。  
両手を下げることを「𦵏」とする。「𦵏」は「下」の古字。

土、木、示（神事）を𦵏「古の「社」字」とする。

矢と耳を「𦵏」〔矢で耳を貫く（刑）〕とする。

刀と耳を「𦵏」（𦵏る）とする。

王が門の中にいることを「𦵏」とする。

會意 合文以成其義。

言欲其順、故口辛「音愆」爲言「辛从𦵏、古上字。从干爲辛。口辛爲言」。

止戈爲武。

力田爲男。

女帚爲婦。

人言爲信。

人爲爲僞。

吏於人爲使。

反於后爲司。

后口爲𦵏。

〔校異〕

a 上…叢書集成本、「𦵏」に作る。四庫全書本、「上」に作る。

b 后口爲𦵏…底本・叢書集成本は、「后無

司則有爲」に作る。四庫全書本に拠って改めた。

〔通釈〕

會意 文字を合わせて意をなすもの。

言葉は順なることを欲する、それゆえ口と辛「音は愆」を「言」とする「辛は「上」より構成される、

古の「上」字である。また「干」より構成されて「辛」となる。口と辛を「言」とするのである。

戈を止めるを「武」とする。

女と帚ほうきを「婦」とする。

人が為すことを「偽」とする。

后きさきを（左右に）反転させると「司」となる。

田に力めるを「男」とする。  
人の言を「信」とする。

人を吏おさめることを「使」とする。

后（厚）と口を合わせて「𠂔」（厚く怒る声）とする。

### 諸聲

本一字以定其體、而附他字以諧其聲。

江河鵝鴨、江河左从水、以定其體、而諸聲在右。鵝鴨右从鳥、以定其體、而諸聲在左。褰裳諸聲在上、簾箔諸聲在下、圍圃諸聲在內、徽輿諸聲在外。徽、三糾繩也、故从糸、从微省聲。若江河以工可字諧聲者、取其聲之同母字也。及草之類从艸、木之類从木、金之類从金、土之類从土、而附他字、以諧聲者是。

〔校異〕

a 外：叢書集成本、「内」に作る。

〔通釈〕

諸聲（形声）

一字に基づいて形体を定め、そこに他字を附して音声とするもの。

「江」「河」「鵝」「鴨」字は、「江」「河」字の左側は水（氵）より構成され、その形体を定め、音声は右側となる。「鵝」「鴨」字の右側は「鳥」より構成され、その形体を定め、音声は左側となる。「褰」「裳」

字は音声が上部となり、「簾」「箔」字は音声が下部となり、「園」「圃」字は音声が内側となり、「微」「興」字は音声<sup>イ</sup>が外側となる。ただし「微」とは、三本撚りの縄のことであり、それゆえ「糸」より構成されるが、「微」よりも構成され、音声は省略されている。「江」「河」字などは、それぞれ「工」「可」が音声とされ、母字（江、河）と同じ音声の字（工、可）が取られている。草の類の文字は「艸」より構成され、木の類の文字は「木」より構成され、金の類の文字は「金」より構成され、土の類の文字は「土」より構成され、そこに他字を附して音声とするのが、諧声である。

轉注 同意相受、考老字是、此說非也。古之人於文有解釋其意義、謂之轉注者、本一字、更有意

義可轉用也。有一轉爲二聲用者、有再轉爲三聲用者、有至四聲而皆有義者。

長、本長久字。長則物莫先焉、故又爲長幼之長。長則有餘、故又爲長物之長。

行、本行止字。行則有蹤跡、故又爲德行之行。行則有次序、故爲周行之行。又子路行行之行、無義也。以聲相近而用之、假借也。

齊、整齊也。專一人之意齊「音齋」如、故爲之齊戒之齊。齊則適等、無過不及、有調適之意、故爲酒齊刀劍齊之齊。

令、又爲使令之令。

乾、卦名、陽也。故爲乾燠之乾。

數、一二之名。有數則可數、故又爲數往之數。有數則密矣、故又爲疎數之數。又音促、數罟、亦密罟也。亦

轉注也。凡此之類、皆聲轉而各有義、故曰轉注。

又有本其意、特轉聲用之者。以女爲人妻、謂之妻。以女妻人曰女。指所載之物、統曰載「昨代切、不輸爾載」。如此類、本皆無其字、時人有是語、故原其意、轉聲而用也。此類字不爲假借者、本其意故也。

〔校異〕

a 於…叢書集成本、「亦」に作る。 b 蹤…叢書集成本・四庫全書本、「縱」に作る。 c 專一人之意…四庫全書本、「人意專一則」に作る。 d 之…叢書集成本・四庫全書本、此の字無し。 e 聲轉…叢書集成本、

「轉聲」に作る。

〔注釈〕

(1) 同意相受考老字是…許慎『說文解字』卷一五上に、「轉注者、建類一首、同意相受、考老是也」とある。

〔通釈〕

転注

「意が同じで相互に付与しあうもの、「考」字や「老」字などがそれである」という説は誤りである。古の人が文字の意を解釈するにあたり、ある文字を転注とするのは、もと一字であるが、さらに転用される意がある場合である。一たび転じて二つの音声がいられるもの、二たび転じて三つの音声がいられるもの、四つの音声があり、そのいずれにも意を有するものなどである。

「長」は、もと長久たるさまを表す文字である。長久であればこれより先立つものはない、それゆえまた長幼の「長」となる。さらに長じていれば余剰がある、それゆえ長物の「長」となる。



假借 本無其字，原它字聲意而借用之，亦有只借聲而用之者。先儒謂令長字是。非也。

能、本獸之軼材者。賢能之能借用之。豪、本獸之威猛者。豪傑之豪借用之。俗作毫、非。正如碧是碧玉之

碧、玉之碧色者。蒼弘血化爲碧、故碧从石、用爲碧。系之之系、與此正同、皆假借也。

震、劈歷也。動物、亦物之所懼。故爲地震之震、又爲震來虩虩之震。

須、髭也。鬚無實用、不可無、故爲須待之須。又爲須用之須。此類併其聲意借用之也。

旃〔古人止語〕、思〔語始卒之辭〕、旃、旗也、指揮之用也。故旃爲指物之辭。詩曰舍旃、舍此也。思屬土、

五行成於土、五事成於思。故思爲語始卒之辭。思樂泮水、始語也。不可度思、卒語也。此類亦當時有是語、

故爲文者原其字意、亦因其聲而用之也。不然、旃旃皆旗、何獨取於旃。思私同音、何獨取於思。

尊、尊彝也。又爲尊卑之尊、卽酒尊字、古者大酋主酒、周官用此、後人始有從木从缶、以尊或有瓦木也。如

刑鼎、古人亦用刑字、後人始用銅。

雅、禽也〔俗作鴉〕。又爲風雅之雅〔古疋字如此〕。

象、獸也。又爲象象之象。此類只借其聲用之也。

以水爲棚也、所以覆矢、可以飲抑釋水忌〔古人通冰字〕。

以麋爲涓。居河之麋〔水草荒穢處〕。

以來爲秣。來牟。先儒謂來本瑞麥、天所來。故用往來之來、非也。周以前有來字。

易以盍爲合、以羸爲繫。此類亦借其聲而已、於字無義也。又以定爲頤題頤、麟之定、古人通用。

常爲棠「棠棣借爲棠」、害爲曷「害澣」、彭爲旁「匪其彭」、居爲其「何居」、此類皆古人因其聲相近而借用之、於字亦無義也。所謂六書之體可攷見者如此、豈盡是會意、字字可說哉。

爾雅飛類謂之雌雄、走類謂之牝牡。故雌雄字从隹、羽族也。鳥短尾總名隹。牝牡字从牛、毛屬也。

書以越字爲始語。詩以侯字維字爲始語。楚辭以蹇字羌字爲始語。易以若字如字爲止語之辭。詩以只字且字爲止語。楚辭則些字。又日居月諸、叔善射忌「音既」、聊樂我員「音云」、皆當時之語、爲文者借字聲而用之。

#### 〔校異〕

a 字：叢書集成本・四庫全書本、「事」に作る。 b 玉之碧色：叢書集成本、「玉碧之色」に作る。 c 爲

碧系之之系：叢書集成本、「爲碧系之系」に作る。四庫全書本、「爲碧色之碧」に作る。 d 劈：叢書集成

本・四庫全書本、「辟」に作る。 e 併：叢書集成本・四庫全書本、「并」に作る。 f 糜：叢書集成本・

四庫全書本、「糜」に作る。 g 處：叢書集成本、此の字無し。 h 來牟：叢書集成本・四庫全書本、此の

二字を小字双行注とする。 i 頤題頤：底本は「頤頤頤」に作る。文意より改めた。叢書集成本・四庫全書

本は、此の三字を「頤」一字に作る。 j 古人通用：叢書集成本、「頤頤古人通用」に作る。四庫全書本、

「頤定古人通用」に作る。

#### 〔注釈〕

(1) 先儒謂令長字是：『說文解字』卷一五上に、「假借者、本無其字、依聲託事、令長是也」とある。「令」

「長」兩字とも仮借ではなく、転注となる。一九二頁参照。



(2) 萇弘血化爲碧…萇弘は、讒言にあつて自害した周の敬王の忠臣。『莊子』外物に「弘死於蜀、藏其血三年而化碧」〔弘蜀に死し、其の血を藏すること三年にして碧と化す〕とある。

(3) 五事…貌、言、視、聽、思の五を指す。『尚書』洪範に、「一、五事。一曰貌、二曰言、三曰視、四曰聽、五曰思。貌曰恭、言曰從、視曰明、聽曰聰、思曰睿。恭作肅、從作乂、明作哲、聰作謀、睿作聖」とある。

(4) 先儒謂く故用往來之來…『說文解字』卷一五下に、「來、周所受瑞麥、…天所來也。故爲行來之來」とある。

### 〔通釈〕

#### 仮借

元々その意味の字がなく、他字の音声や意味に基づいて借り用いたもの、または音声だけを借りて用いたもの。先儒が「令」字や「長」字を仮借とするのは、誤りである。

「能」は、もと軼材たる獸（熊）である。借りて賢能の「能」として用いる。

「豪」は、もと猛々しい獸（豪猪）である。借りて豪傑の「豪」として用いる。俗に「毫」に作るのは、誤りである。たとえば「碧」は、碧玉の「碧」であり、玉が碧色のさま（を表す字）でもある。萇弘の血は化して碧となったという。それゆえ碧は「石」より構成され、（玉としての）「碧」に用いられた。系く（つなぐ）が「系（糸すじ）」であることもまさに同じであり、「豪」字と「毫」字の関係とは異なり）いずれも仮借である。

「震」は、雷が鳴り響くことである。万物を揺り動かし、また万物が懼れるところである。それゆえ地震

の「震」となり、また『周易』震卦「震の来るとき號號たり」の「震」となる。

「須」は、鬚である。鬚は実用的なものでないが、ないわけにはいかない。それゆえ須待の「須」（須つ）、また須用の「須」（須いる）となる。これらの類は、いずれも音声と意味を借りて用いたものである。

「旃」「古人の結語の辞」、「思」字「発語、もしくは結語の辞」。「旃」は、旗であり、指揮をするときに用いる。それゆえ「旃」は物を指す辞（旃）である。『毛詩』（唐風・采芣）に「旃を捨てよ」というのは、「此を捨てよ」の意である。「思」は土に属し、五行（木火土金水）においては土となり、五事（貌言視聽思）においては思となる。それゆえ「思」は発語、もしくは結語の辞となる。『毛詩』魯頌・泂水に見える（「思に泂水を楽しむ」は発語の辞であり、『礼記』中庸に見える）「度るべからず（不可度思）」は結語の辞である。これらの類も、当時にこの言葉があり、それゆえ文字をつくるものは、その意味に基づき、音声によって用いたのである。そうでなければ、「旃」「旗」字はいずれも旗の意であるのに、どうして「旃」字のみが（結語の辞として）採られようか。「思」「私」字は音が同じであるのに、どうして「思」字のみが（発語、もしくは結語の辞として）採られようか。

「尊」は、『周礼』春官の司尊彝である。また尊卑の「尊」となり、それは酒尊の「尊」（樽）字である。古は大酋が酒を主つており、『周礼』では「尊」字が用いられた。後人が「木」から構成される（「樽」字）と「缶」から構成される（「樽」字）を用いた。尊（酒器）には瓦製と木製があるとしたからである。刑鼎（刑法を鑄刻してある鼎）なども、古人は「刑」字を用いたが、後人が「銅」字を用いた。

「雅」は、禽である「俗に「鴉」に作る」。また風雅の「雅」「古の「疋」字がこれである」となる。

「象」は、獸である。また『周易』の「象（伝）象（伝）」の「象」となる。これらの類は、ただ音声を借りて用いたものである。

「氷」を「捌」とする、矢を覆うもの（矢筒）であり、（捌を用いて）飲むこともできる。（『毛詩』鄭風・大叔于田に）「抑に氷（捌）を釈く」とある。「古人は「氷」字に通じる。」

「麋」（麋れるさま）を「湄」（水辺）とする。麋れた河川「水草が荒れ穢れたところ」に在ること。

「来」を「稂」とする、大麦のことである。先儒は「来はもと（周王室が受けた）瑞祥ある立派な麦。それは天が来したもので、往來の「来」字として用いる」と言うが、これは間違いである。周代以前にも「来」字はあった。

『周易』では、「盍」を「合」とし、「羸」を「累（繫）」とした。これらは、みな音声を借りたのみであり、文字に意味はない。また「定」を「頤」「題」「額（領）」（いずれも「ひたい」の意）とした。（『毛詩』周南・麟之趾に）「麟之定」とあり、古人は通用したのである。

「常」を「棠」とする「棠棣（やまぶき）」を借りて「常」とする。「害」を「曷」とする（『毛詩』周南・葛覃に）「害れを澣ふ」とある。「彭」を「旁」とする（『周易』大有・九四に）「其の彭たる（強く盛んなさま）に匪ず」とある。「居」を「其」とする（『礼記』檀弓上などに）「何居や」とある。これらの類は、古人がその音声に近いことによって借りて用いたものであり、文字に意味はない。いわゆる六書の体の中で考察すべきものはこのようなものであり、どうして会意にあたる文字を、字ごとに論じるだけで済まされようか。

『爾雅』は「飛」類に「雌」「雄」字を載せ、「走」類に「牝」「牡」字を載せる。それゆえ「雌」「雄」は、「隹」より構成される羽を持つ種族である。短い尾を持つ鳥を、まとめて「隹」と名付ける。「牝」「牡」は、牛より構成される毛を持つ類の動物である。

『尚書』では、「越」字を発語の辞とする。『毛詩』では、「侯」「維」字を発語の辞とする。『楚辭』では、「蹇」「羌」字を発語の辞とする。『周易』では「若」「如」字を結語の辞とする。『毛詩』では、「只」「且」字を結語の辞とする。『楚辭』では「些」字がそれにあたる。また『毛詩』邶風・日月「日居月諸」(「日よ月よ」、鄭風・大叔于田「叔善射忌」音は既<sup>き</sup>)「叔善く射す」、(鄭風・出其東門「聊樂我員」音は云<sup>い</sup>)「聊か」と楽しまん」などもみな、当時の語辞であり、文字をつくる者はその文字の音声を借りて用いたのである。

#### 今所傳六經之文、有異於漢儒所傳之文

營營青蠅、作營營。

勿拜、作扒拔也。

噬肯、作逝肯。

衣裳黼黻。〔音楚、五色鮮明。〕

桃之夭夭。

平艷東作。

西伯戎黎。

泉陶〔皐〕。

類木有𣎵<sup>木</sup>栢<sup>木</sup>。木再生條也。後人傳寫脫弓字、遂作由。說者云由栢、非也、當作𣎵。見說文。

我興受其退。旁逮孱功。是今文有非漢儒所傳之文、漢儒所傳之文、非孔子之文。欲字字而解之、可乎。

而〔毛類〕、冬官作其麟之而、訓如孟子而未之見。左傳若而人。又訓汝、而翁。又爲止語、殆而。

敦「五音、五義」音團、聚也。詩有敦瓜苦。音彫、與<sup>(1)</sup>惇同、弓也。音對、器也、左傳珠盤玉敦。又音頓、歲在酉曰困敦。又都昆切、厚也。

思「念也」、又爲于思之思「桑才切」。今作懸、多髯也。

洺「四音、一義」、音洪、音缸、音閏、音絳、皆水不遵道也。

甌「三音、一義」、言、又上聲、去聲、皆甌名也。

穀「書方穀、訓祿」、詩穀則異室、訓生。穀旦、訓善。

薰「香草」葦「臭」同一音。

古文以赤爲尺、黍爲七、皆是借聲用字。

古易羝羊觸藩、羸其角「系羸不能進」、羸其瓶之義亦然。系羸其瓶、故致傾覆、不能上水。今之說者、未見古本。又如以盍爲合、彭爲旁、繻爲濡、疑皆傳錄之誤。繻有衣枷、當作繻<sup>(2)</sup>。

#### 〔校異〕

a 泉：叢書集成本・四庫全書本、「泉」に作る。 b 今：叢書集成本、「經」に作る。 c 毛類：叢書集成

本・四庫全書本、此の二字を小字注とせず。 d 其：底本、「麒」に作る。叢書集成本・四庫全書本に拠つ

て改めた。 e 與：叢書集成本、此の字無し。 f 洺：底本、「絳」に作る。叢書集成本・四庫全書本に拠

つて改めた。 g 言：叢書集成本、「音言」に作る。 h 書方穀訓祿：叢書集成本・四庫全書本、此の五字

を小字双行注とせず。 i 系羸不能進：叢書集成本・四庫全書本、此の五字を小字双行注とせず。 j 繻：

叢書集成本・四庫全書本、「濡」に作る。

〔注釈〕

(1) 左傳珠盤玉敦……「珠盤玉敦」の句は、『春秋左氏伝』ではなく『周礼』(天官・玉府)に見える。

(2) 歳在酉曰困敦……「困敦」は子年の異名。「歳在子、曰困敦」の誤りか。『爾雅』釈天に「大歳……在子曰困敦」「大歳……子に在るを困敦と曰ふ」とある。

(3) 繡有衣袽、當作繡……「繡有衣袽」は『周易』既濟・六四に見え、「繡」は王弼・程子・朱熹等が「濡」の誤りとする。ここでは「濡」は伝写の際に誤りやすい字であり、「繡有衣袽」の「繡」も「濡れる」の意ではなく、「繡」の意(彩色の施された絹布)で解釈すべきことを論じたものであろう。『説文解字』卷一三上に、「繡、繪采色。从糸、需聲、讀若易繡有衣」とある。

〔通釈〕

いま伝わる六經の文字の中で、漢儒が伝えた文字と異同のあるもの

〔『毛詩』小雅・青蠅の〕「營營(營營) 青蠅」〔營營たる青蠅〕を「營營」に作る。

〔『毛詩』召南・甘棠の〕「(勿剪) 勿捋」〔剪る勿れ 捋む勿れ〕を「扒拔」に作る。

〔『毛詩』唐風・有杕之杜の〕「噬肯(適我)」〔噬に肯て我に適く〕「噬肯(来遊)」〔噬に肯て来り遊ぶ〕を「逝肯」に作る。

〔『毛詩』曹風・蜉蝣「衣裳楚楚」〕〔衣裳楚楚たり〕を〔衣裳黼黼〕〔に作る〕〔音は楚、五色が鮮明たるさまのこと〕。

〔『毛詩』周南・桃夭「桃之夭夭」〕〔桃の夭夭たる〕を〔桃之夭夭〕に作る。

『尚書』堯典「平秩東作」(東作を平秩せしむ)を「平艷東作」(に作る)。

『尚書』の篇名「西伯戡黎」(を)「西伯戡黎」(に作る)。

『尚書』皐陶謨などに見える「皐陶」を「泉陶」(に作る)「(もと)皐(陶)」。

『尚書』盤庚上「顛木之有由蘖」(顛木の由蘖(若芽)有り)を「顛木有𣎵栝」(に作る)「𣎵」は、木が再び枝を生やすことをいう。後人が伝写する際に「弓」字を脱して、そのまま「由」となった。「由栝」だと説くものもいるが、それは間違いで、「𣎵」字とすべきである。『説文解字』を参照せよ。』

『尚書』微子「我興受其敗」(我興な其の敗を受く)を「我興受其退」(に作り)、(『尚書』堯典「方鳩嵬功」(方ねく鳩めて功を嵬ふ)を)「旁述孱功」に作る。これらは今文のうちで、漢儒が伝えた文字でないものである。漢儒が伝えた文字は、孔子の文字ではない。字ごとに解析していけばよい。

「而」[毛の類]は、(『周礼』冬官(梓人)に「作其麟之而」(其の麟と而(頰髯)とを作る)とある。

「如し」と訓むのは、『孟子』(離婁下に)「(望道)而未之見」(道を望むこと未だ之を見ざるが而し)とあり、『春秋左氏伝』(襄公十二年に)「(夫婦所生)若而人、(妾婦之子)若而人」(夫婦生む所の若而人(このような人)、妾婦の子の若而人)とある。また「汝」と訓むのは、『史記』項羽本紀に「(必欲烹)而翁」(必ず而の翁を烹んと欲す)とある。また(而は)結語の辞ともなる。(『論語』微子に)「(今之從政者)殆而」(今の政に従ふ者は殆し)とある。

「敦」[五つの音、五つの意がある]は、音は団、聚まること。『毛詩』(豳風・東山)に「有敦瓜苦」(敦たる瓜の苦き有り)とある。音は彫で、彈(朱漆をかけた弓)と同じで、弓のこと。音は対で、器物のこと。

『周礼』（天官・玉府）に「珠盤（槃）、玉敦」とある。また音は頓<sup>●</sup>で、子<sup>ねどし</sup>年のことを困敦<sup>こんとん</sup>という。また都昆の切で、厚いさま。

「思」<sup>おも</sup>「念うこと」。また于思<sup>うさい</sup>（髭面<sup>ひげづら</sup>）の「思」<sup>おも</sup>「桑才<sup>そうさい</sup>の切」となる。いま「髻」に作り、頬髭の多いこと。

「洿」<sup>く</sup>「四つの音、一つの意がある」は、音は洪、音は缸、音は関、音は絳。いずれも水が河道に沿わない（あふれ出る）こと。

「甗」<sup>さん</sup>「三つの音、一つの意がある」は、（音は）言、また上声、去声。いずれも甗<sup>こしき</sup>の名。

「穀」<sup>こく</sup>『尚書』（洪範に）「（既富）方穀」<sup>な</sup>「既に富み方びに穀あり」とあり、「禄」と訓む」は、『毛詩』（王風・大車に見える）「穀則異室」<sup>い</sup>「穀きては則ち室を異にす」は、「生く」と訓む。『毛詩』陳風・東門之粉に見える）「穀旦<sup>こくたん</sup>」は、「善い」と訓む。

「薰」<sup>くん</sup>「香草」は、「華」<sup>か</sup>「生臭物」と一つの音を同じくする。

いにしえは「赤」を「尺<sup>●</sup>」とし、「黍」を「七<sup>●</sup>」としていたが、いずれも音声を借りて用いた文字である。

（「累（累）」は）古の『周易』（大莊・九三）に、「羝羊触藩、累其角」<sup>ていよう</sup>「羝羊藩に触れ、其の角を累（羸）む」<sup>かろ</sup>「からめられて進むことができない」とある。また（井・卦辞）「累其瓶」<sup>つるびん</sup>「其の瓶を累む」（の「累」の意も同じである。瓶をからめとられたため、ひっくりかえって、水を汲み上げることができない。いま「累」について）説くものは、古の『周易』を見ていないのである。

また「盍」を「合」とし、「彭」を「旁」とし、「濡」を「濡」とするのなどは、おそらくいずれも伝写の際に誤ったものであろう。（『周易』既濟・六四）「緇有衣袽」は、「緇」に作るべきである。



一二三四五六七八九十、演而申之、至於不可窮詰。凡天地之運行、四時之代謝、日月星辰之進退、九州萬物之繁夥、果不逃其數、可以窮變化而行鬼神、功用抑大矣。世人皆云蒼頡所造、而曾不究其旨。方伏羲畫卦、仰則觀天而畫一、俯則觀地而畫二、中則觀人而畫三、觀四方而得四、觀天地之氣交午而得五、以至六七八九十、亦莫不然。始於三畫、分爲八卦、九六藏於中。則知此十字、非伏羲畫卦時爲之不可。蒼頡但能因此而字之。如人之字育、爲之滋長、變出他文。學者當細攷之、不可以常字觀。近王荊公留心字學、皆爲之解釋、至此十字、却無贊辭。要之如日月星辰、十干十二支、金木水火土、首目口耳手足、山石蟲鳥等正字、非聖人不可作。蒼頡體其意、以從偏傍而字之耳〔雲麓謾鈔〕。正始之音畢。

〔校異〕

a 畫卦：叢書集成本・四庫全書本、「畫卦時」に作る。 b 中：叢書集成本・四庫全書本、「其中」に作る。

〔注釈〕

(1) 王荊公留心字學：北宋王安石『字說』を指す。王荊公は、王安石。荊国公に封ぜられていたので荊公と称された。本誌二〇号一三六頁参照。

(2) 雲麓謾鈔：南宋趙彥衛『雲麓謾鈔』十五卷。古今の天文、地理、制度、故事などの雑記を載せた書。いま傳根清による標点本（唐宋史料筆記叢刊、中華書局、一九九六年八月）がある。なお、ここに引用さ

れる文は、現行の『雲麓謄鈔』には未検。

趙彦衛（一一四〇頃～一二二〇頃）は、字は景安。河南浚儀の人。『宋史』や『宋元学案』に伝はない。その事跡については、傅根清評点の前掲書、附録「趙彦衛生平考索」に詳しい。

〔通釈〕

一二三四五六七八九十の数は、これらを演繹していけば、窮まりのないところに至る。およそ天地の運行、四時の代謝、日月星辰の進退、九州万物の繁多なものなど、すべてこの数から逃れることはできない。（この数は、『周易』繫辞上にあるように）（天地万物のあらゆる）変化を窮め、（変化の原因たる）鬼神をめぐらすことのできるものであり、その功用はいよいよ大きい。世の人々は、「蒼頡の作った文字では、その本旨を考究できない」という。伏羲が卦を描いたとき、天を仰ぎ見て「一」を描き、地を俯瞰して「二」を描き、天地の間に人を見て「三」を描き、四方を見て「四」とし、天地の氣が入り交じるのを見て「五」とした。六七八九十についても、このようであった。三を描くところから、分かれて八卦となり、九と六がその内に蔵された。すなわち一から十までの十字は、伏羲が卦を描いた時にすでに作られていたのである。蒼頡はただ伏羲の創作に依拠して、これを字としていったに過ぎない。（そして）人々がはぐくみ育て、繁茂し成長させていくように、これらの文字も変出していった。学ぶ者は子細に考察するべきであり、常用している字によって見てはいけけない。近ごろでは王安石が文字学に意をとどめ、多くの文字に解釈を附していたが、一から十の十字については論及しなかった。つまり、日月星辰、十干十二支、金木水火土、首目口耳手足、山石虫鳥などの正字は、聖人でなければ作れないものであり、蒼頡は聖人の意に依拠し、偏や傍と

しながら字を作っていただけなのである『雲麓漫鈔』。  
以上、『正始之音』。